

## 肺結核ノ一般療法(宿題報告)

醫學博士 田 澤 鏗 一一

肺結核ノ一般療法トシテ私ノ分擔致シマシタ範圍ハ頗ル多方面ニ互テ居リマスカラ、茲ニハ主トシテ我々ガ特別ニ考察シタリ經驗シタリシタ事項ノ筋道ヲ述ベテ置クコトニ致シマス。各種ノ文獻及ビ各個ノ成績ノ詳述ハ今後復續報トシテ本誌ニ掲載スルコト、シ、本報告ハ之レヲ其第一報トシテ御覽ヲ願フコトニシテオキマス。

### 豫防的治療及治療的豫防乃至豫防的治療

肺結核ノ治療トイフハ、ソノ病竈ガ觸接増大、淋巴轉移、血行轉移、氣管内轉移等ニ依リ、肺尖ヨリ下肺へ、一肺ヨリ他肺へト次第ニ蔓延シテ、健康部ヲ侵シテ行クノヲ防グトイフガ、第一問題デアツテ、ソレサへ起ラテバ、通常患部ノ治療ハ何時カハ自然ニ起リ得ル譯デアリマス。故ニ肺結核治療ノ第一眼目ハ、健康肺部ノ爲ノ豫防トイフ點ニ置ク可キデアルト云テモ宜シイ。

又一旦肺結核ガ治癒シテモ、一度罹患シタ様ナ者ハ、兎ニ角抵抗力ノ弱イ肺臟(又ハ大ナル素因)ヲ有スル者デアリマスカラ、再發ニ向ツテ充分ノ豫防ヲシナケレバナリマセン。之レハ即チ肺結核恢復期、又ハ治療後ノ療法ヲ完全ニスルコトデアリマシテ、治療即チ豫防デアリマス。斯ク肺結核患者ノ經過ヲ長ク觀察スルトイフコトハ肺結核患者ノ治療ニ當リテモ、又結核撲滅事業ノ社會的問題トシテモ、極メテ緊要ノ點デアリマス。

又肺結核ノ發病ニ就テ考ヘマスルニ、結核ノ感染ハ多クハ年少ノ時代ニ起ルモノデ、健康ニ見エテ居ル御同様モ、大部分ハ既ニ結核感染者デアツテ、ソノ結核ガ身體ノ抵抗力ノ減弱セル時機ニ於テ、病徵ヲ現ハシ來ルモノデアルカラ、感染ト發病トハ違フトイフ大體ノ説明ガ今日通常承認セラル、所デアリマス。故ニ此ノ場合ニハ結核ノ豫防トイフハ、實



ニハ自ラ一定ノ限界ガアルモノデアルガ、廣義ノ治療ハ其後長ク怠テハナラナイモノデアリマス。而シテ狹義ノ治療ト、廣義ノ治療ノ移行期デアル所ノ早期治療又ハ後療法ノ期間ニ於テハ患者ノ個性、境遇ニ依リ醫師ノ方針ニ從テ、其實行方法ハ最モ多岐ニ分カル、ノデアリマスガ、何レニシテモ此時期ニ治療ヲ中止シテ可イト云フ譯デハナイ。而シテ此上更ニ長ク廣義ノ治療ヲ續ケテ行カウトイフコトニナリマスト、各治療項目ノ應用モ狹義ノ治療ノミニ就テ考ヘテ居タ時ヨリハ遙カニ範圍ガ廣ク變化ノ多イモノトナルノデアリマス。

### 一般療法ノ意義

衛生榮養氣候療法。生理的療法。

各種疾患ノ治療法ニ原因療法ト一般療法ノ二種ガアリマスガ、結核治療ニ當テハ一般療法ハ凡テノ治療法中ノ最モ重要ナ位置ヲ占メテ居ルモノデ、解釋ノ仕方ニ依テハ原因療法ノ意味ヲモ包含シテ居リマス。

相當進行シツ、アル肺結核ガ一般療法ダケデ決定的ノ停止又ハ治療ヲ招來シ得ルコトハ確カナ事實デアリマス。而シテ又一面ニハ如何ナル他ノ治療法ヲ行フ場合ニモ一般療法ヲ缺クコトハ出來マセン。故ニ結核治療法ハ凡テ一般療法ヲ基礎トシテ其基礎ノ上ニ終始セテバナラヌモノデアリマス。

一般療法ハ多クハ天然物或ハ生理的事項ノ適當ナル應用ニ依ルモノデアリマシテ衛生榮養氣候療法ナドイハレテ居リマス。(簡潔ニ纏メテ生理的療法ト言テモヨカラウト思ヒマス。生理學ノ理論ニ從ヒ各種ノ生理的作用ニ關スル事項ヲ適當ノ度合ヒニ應用スルニ過ギナイトイフコトガ多イノデアリマス)。

一般療法ニ應用サレル事項ハ甚ダ多クアリマスガ其用ヒ方カライフト靜護 *Schonung* ト習練 *ibung* ノ二段デアリマシテ其中デモ通常ハ前者ガ主要ナ部分ヲ占メテ居リマス。併シ後者モ決シテ之レヲ輕視スルコトハ出來ナク、殊ニ治療ノ範圍ヲ廣義ニ解シテ行ク程益々ソレガ重要トナツテ參リマス。

## 安靜療法

肺結核ノ一般療法トシテ應用サル、治療項目ニハ種々ノ事項ガ含まレテ居ルガ其中デ最モ主位ヲ占ムルモノハ安靜デアリマス。嘗テ東京市療養所ノ患者ニ就テ遠藤君、黒丸君、鈴木君三君ガ結核ノ發病動機ヲ調ベタ時ニモ過勞トイフコトガ最モ多數ヲ占メ、殊ニ婦人ニテハ精神上ノ過勞トイフガ相當多クアリマシタガ、前ニ述ベタ豫防的治療ノ見地カラ申シマスト、治療ノ際ニ於テモ、ヤハリ患者ニ適當度以上ノ運動又ハ勞苦ヲサセルトイフコトハ最モ惡ルイコトデアリマス。安靜療法ノ實行方法ヤ效果ニ就テハ此所ニ申述ベル迄モナイコト、思ヒマスカラ、何故ニ安靜ガ有效ナルカノ理由ニ就テ考察シタ點ヲ左ニ述ベテ見マセウ。

身體ノ安靜ヲ守ルト肺臟及ビ心臟ノ安靜ガ得ラレ又其他ノ臟器モ安靜トナルトイフコトガ諸種ノ利益ヲ來ス第一原因トナリマス。

抑々身體ノ新陳代謝ハ身體ノ運動ヤ食物ノ消化等ニ依テ著シク高マルモノデアルガ、殊ニ筋肉ノ活動ハ新陳代謝ヤ體溫發生ニ至大ノ關係ヲ有シテ居ル、吾々ノ要スル空氣ヤ酸素ノ分量ハ殆ド身體ノ運動ノミニ關シテ増減スルト見テ可イ程密接ナ關係デアツテ、極メテ僅カノ筋肉動作デモ既ニ酸素消費ト炭酸瓦斯排泄ヲ高メルモノデアリマス。從テ筋肉ノ運動ハ自然呼吸ヲ深クシ且ツ頻數ニスルモノデ姿勢ヲ正シテ居ルダケデモ既ニ脈搏呼吸ガ高マツテ瓦斯交換ハ安靜時ニ比ベルト凡ソ二割モ増加シマス。

ツンツ氏ハ運動時ノ呼吸ニ就キテ平時ノソレト比較シテ

散歩デハ二倍半。背囊ヲ背負テ行軍スルトキ又ハ輕度ノ登山デハ四倍。自轉車ニテ疾走スルトキ又ハ強度ノ登山駈步等デハ六倍又ハソレ以上。競漕等ニテ極度ニ筋肉ガ働クトキハ二十倍又ハソレ以上ニモ高マル

トイフテ居リマス。新陳代謝ガ亢進スレバ自然血液ガ酸素、炭酸瓦斯ノ運搬ヲ之レニ應ジテ擔當セザバナラヌ。然ルニ血液ハ肺臟ニ於テハ平素既ニ飽和サレルマデ酸素ヲ採ルモノデアルカラ、組織ニ平素以上ノ多量ナル酸素ヲ供給セン

タメニハ自然ニ循環ノ回数ヲ増ス外道ガナイノデアリマス。ソノ爲メニ心臟ガ劇ク働クヤウニナリ、同時ニ呼吸ガ深クナリ又頻數ニナリマス。而シテ又深吸氣ノ際ニハ胸腔内ノ陰壓ノ度ガ強クナツテ身體他部ヨリ血液ヲ胸腔ヘ吸入レルコトモ強クナリ、血液循環ガ高メラレマス。故ニ私ハ心臟ノ働キヲ助ケツ、運動サセルトイフヲ原理トシテ虛弱ナ體質ヲ有シ、心臟肺臟ノ弱イ者ニ、強烈ナ身體運動ヲ行ハシムル前ノ準備運動トシテ、一定ノ呼吸體操ヲ獎勵シテ居リマスガ、體操ノ方デハ

氏ナドモ、筋肉バカリ過度ノ發達ヲナシテ、心臟、肺臟等内臟ノ發達ノ之ニ伴ハナイ者ニ在リテハ、此筋肉ハ一ツノ寄生蟲ノヤウナモノダト言テ居マス。(Exercise in Induction and Medicine) 私ハ此寄生蟲視スル語ヲ體操學上ヨリ面白イト思フ一人デアリマスカラ、茲ニ同氏ノ著書ヨリ其寫眞ヲ引用シテ御參考ニ供シテ置キマス。兎ニ角筋肉ノ機能ハ心臟肺臟ノ活動トノ密接ナ連鎖關係ノ下ニ立ツモノデアリマスカラ、身體安靜ニ依テハ恰度前記ノ反對ニ筋肉ガ弛緩シ、酸化作用ガ減少シ、下部靜脈ヨリ血液ヲ胸腔ヘ吸上ゲル必要モ減ジ、從テ心臟肺臟ガ安靜トナ



心筋ノ體操  
肺ノ體操  
心臟ノ體操  
力ノ體操  
件ノ體操  
ハセニ死  
テシズル  
ニ人浮シ

ル譯デアリ、爾他ノ各臟器モ亦安靜ヲ得マス。

却說肺結核ノ患者ニ於テ身體安靜ノ結果ハ如何トイフニ呼吸ガ淺クナリ、又緩徐ニナルト結核病竈ヨリノ排出物ガ肺ノ健康部ヘ吸入サレルコトガ減ズル、又心臟

搏動ガ靜カトナルト、淋巴道及ビ血行ニ依ル微菌ノ撒布モ減少スル。從テ體內殊ニ肺臟内ニ於ケル豫防的治療ノ本旨ヲ完フスルニ適當ナ條件ガ得ラレル譯デアリマス。

次ニ重要ト思ハレル點ハ臟器安靜殊ニ心臟肺臟安靜ノ結果トシテ病竈ノ血行ガ減ジ、爲メニ毒物ガ病竈カラ他ヘ流出スルコトガ減ズルコトデアリマス。身體運動ニ依テハ自家「ツベルクリン」療法 Autotuberkulinisierung ガ出來ルトイヒマサガ、ソレガ過度ニナレバ固ヨリ有害デアアル。故ニ身體安靜ニ依テハ之レノ過度ノ中毒ガ減ズル譯デアリマス。是等ノ意

味ニ於テハ肺結核ノ一般療法ハ原因的療法ノ意味ヲ持ツモノト云ハレマセウ。  
其他又身體安靜ノ結果新陳代謝ノ物質消費ガ減少シマス故、蛋白質及ビ脂肪ノ沈著ガ助ケラレテ、必要ナル體組織ノ増強ヲ來スコトモ出來マス。

如上ノ説明ノ外尙 Arthur Valder 氏ハ臟器安靜 (Organruhe) トイフコトニ殊ニ重キヲ置イテ居マス。新陳代謝及ビ各臟器ノ機能カラ臟器相互間ニハ多種ノ複雜ナル刺激ガ起ルモノデアツテ正常ノ臟器刺激 normale Organreize ハ健康者デハ有益ナ作用ヲナスモノデアルガ、患者デハソノ正常刺激デモ免疫生物學上ノ平衡狀態ヲ脅カスコトガアル。然ルニ身體安靜ヲ守ルトキハ、臟器安靜ガ得ラレ臟器機能減降ヲ來スノ結果トシテ、臟器刺激ガ減降シ、又ハ缺如スル。コノ刺激減少ハ呼吸ノ「大サ及ビ運動」ノ減降ト相伴テ愛護靜臥療法ノ有效作用ノ主要點ヲナスモノダ——ト言テ居マス。

肺臟ヲ靜置スル特殊ナル方法トシテ諸種ノ外科的療法ヤ絆創膏貼付ナドガ行ハレマスガ、東京市療養所ニテ殊ニ力ヲ盡シテ居ルノハ人工氣胸デアリマス。之ニ對スル吾人ノ意見ハ適當ナル病例ニ於テ、適當ニ之レヲ行ヘバ確カニ有效デアル併シ其適應症ヲ以前ノヤウナ嚴重ナ意味ニ於テ選ブト之ニ適應スル患者ハ極メテ少イトイフコトニナリマスガ近來ノ傾向ノヤウニ稍々緩ニスルト相當病例モ増シマス。尤モ咯血患者ニ施行シテ見事ニ咯血ノ止マルトキナドハ有效ナ事ニ文句ハアリマセン、適應症選定ノ中デ一番緩ニスルト嚴ニスルトノ差ノ起ルハ一肺ニ向テ人工氣胸ヲ行ハントスルトキ他肺ガドノ程度迄侵サレ居ルトキ中止トスルカノ問題デアリマス。又病側ニ在テハ輕症ナ者ニモ行フカ否カデ大ニ相違シマス。東京市療養所デ村尾圭介君ト持木丈二郎君ガ嘗テ嚴重ナ意味デ調査シマシタ時ニハ七〇七名ノ患者中是非之ヲ必要トスルモノハ七名(一%弱)ニ過ギナク、略適應症ヲ有スルガ行フヤ否ヤハ醫師ノ考ヘ次第トイフ者ハ此外ニ五一一名(七%強)選出サレタ狀況デアリマシタガ技術ノ進歩ト共ニ次第ニ適應症選擇ヲ緩ニシテ居マス。

### 「ツベルクリン」反應試驗

靜護療法ヲ主トスベキカ相當ノ刺戟療法ヲ行フベキカノ判斷ノ參考資料トシテ「ツベルクリン」反應ガ應用サレナイカラ

檢スル爲メ二三ノ觀察ヲ行ヒマシタ。

「ツベルクリン」ノ局所反應試驗トシテビルケ―氏反應ノ成績ニ就テ申シマスト、私ガ矢部君ト共ニ看護婦又ハ我々自身ノ如キ健康者ニ就テ行ヒマシタビルケ―氏反應ハ我々ノ肺結核患者ニ於ケル大體ノ成績ニ比スレバ遙ニ敏感デアリマシテ、容易ニ消失シナク、接種後四ヶ月ヲ經テモ、其ノ局所ニ褐色斑痕ノ認めラル、モノガ多數デアリマシタ。即チ耐久反應 Dauerreaction ヲ呈スルモノガ多クアリマス。之レハ結核感染者ノ皮膚ガ「ツベルクリン」ニ對シテ過敏ナ反應ヲ有スルコトヲ示スモノデアリマス。

第一表 健康者九十二名ニ就テ行ヘルビルケ―氏反應

(甲) 四十八時間後ノ成績

患者數	反應			
	卅	廿	十	士
九二	二四	三〇	二九	二
九二	八三(九〇%餘) 九(一〇%弱)			

(乙) 四ヶ月後ノ成績

患者數	斑痕大				斑痕小		消斑		失痕		初メヨ 陰性 合計
	明ニ	中等度	淡シ	明ニ	中等度	淡シ	消斑	失痕	初メヨ		
八	五	二五	三	三	三	六	一二	二	九二		

備考 乙表ノ陰性者數甲表ト一致セザルハ四十八時間以後ニ於テ陽性ヲ現ハセルモノ(遲滯反應)アルニ由ル

然ルニ我々ノ患者ニ於テハ前記健康者ニ比シテビルケ―氏反應ガ比較的又ハ著シク弱イトイフコトが目立チマス。陰性ノ者モ多數デアリマス。之ハ即チ病勢ノ進行ニ連レテ所謂 negative Anergic ノ状態ニ進シタモノデアリマス。健康者デ全ク結核ニ感染シタコトノナイ人間ハ絶對的ノ「アチルギー」デビルケ―氏反應ガ陰性デアアルコトハ證明サレテ居ル所デアリ、又「ツベルクリン」ノ皮下注射ニ於テモ Engel 及 Brauer ハ結核ニ罹ラザル乳兒ガ二〇〇〇〇「ミリグラム」迄ノ舊「ツベルクリン」ニ堪エタコトヲ報告シテ居リマス。斯ル状態ノ者ガ結核感染後「ツベルクリン」過敏期ニ入り、更ニ發病ノ後病勢ノ増進ニ從ヒ「アチルギー」ノ状態ニ向テ進ムトイフ今日ノ學說ハビルケ―氏反應ニ就テ見レバ能ク諒解サレマス。然ルニ皮下注射ニ於ケル熱其他ノ全身反應ハ之ト趣ヲ異ニシテ居リマス。現在熱候ヲ有スル患者、熱ノ出易キ患者又ハ熱ノヤツト出ナクナツタ許リノ患者等ニ於テハ暫ラク以前ヨリ平温トナツテ、ソレノ安定デアル者ヨリハ熱其他ノ全身反應ガ起リ易クアリマス。左表ハ寺尾殿治、石川友示、矢部升君ノ病舎デ得タル成績ヲ合計シタモ

ノデアリマス。

第二表 「ツベルクリン」皮下注射ニ因ル熱其他ノ全身反應

容態	反應度					合計
	強	中	弱	微	無	
肺結核症候安定セルモノ	一	二	六	九	八	二六
肺結核症候不安定ノモノ	四	一一	八	一五	三	四一
合 計	五	一三	一四	二四	一一	六七

へ、弱反應ヨリ強反應ヘト次第ニ著明トナルヲ目的トシテ、ソウ導クヤウニ一般療法ヲ行ヘバ誤リナキコト、ナル譯デアリマス。之ハ「ツベルクリン」ノ毒作用ト體細胞ノ防禦力トノ拮抗關係カラ説明シ得ラル、所デアリマス。

寺尾、石川、矢部三君ノ病舎デ寒季大氣療法ノ後ニ調べタビルケー氏反應ヲ總計ニシマスト左表ノ通りデアリマス。之レハ寒季大氣療法中ニ於ケル病勢ノ經過ト「ツベルクリン」局所反應トヲ比較スル目的デ纏メタノデアリマスガ、正確ニソノ目的ニ適當スル材料トハ云ヘマセン。ソレハ第二回試験ハ何レモ今年ノ三月中旬又ハ下旬ニ行ヒマシタガ、第一回試験ハ昨年ノ八月ノ者アリ、十二月ノ者アリ、又今年一月ノ者ガアリマスノデ、其間隔ニ就テ非難ノ餘地モアリマス。又成績ノ判定ニ於テモ(一)ガ(十二)ニナリ(十三)ガ(十)ニナルトイフ如キハ記載ノ上カラ云ヘバ著明トナツタ譯デアアルガ、實際ニ當テハ士ナドハ判断ニ苦ンデ記載シタ所デアツテ、各記號ノ中間ノ程度ノモノガ少クナク、且ツ又時日ヲ隔テ、二回ニ見タルモノ、比較デアアルカラ精確ナラザル點アルハ止ムヲ得ナイノデアリマス。經過不良ノ者デビルケー氏反應ガ著明トナツタトイフナドハ斯ル關係ニ因ルモノガ少クナカラウト思ヒマスガ、併シ大體ニハ左表ニ依テ經過良好ナ者ニハビルケー氏反應ガ著明トナル事實ヲ認メラレマセウ。經過不良ノ者デハ該反應ガ減降スルトイフコトハ固ヨリ明カナ事實デアリマス。又本表ニハ經過ノ良好トイフ者ガ大變多イヤウデアリマスガ、之ハ病狀ノ安定ニ傾イタ患者ヲ比較的多ク選ンデ觀察シタ成績ダカラデアリマス。

「ツベルクリン」反應ハ極メテ變化ノ多キモノデアリマスカラ、之ヲ基礎ニシテ一定ノ說ヲ立テルコトハ充分慎重ナラザル可ラザルコトデアリマスカラ、我々モ尙ホ今後多數ノ材料ヲ集メテ改メテ御報告致サウト思ヒマスガ、大體ニ於テ皮下注射ニ因ル全身反應ノナルベク起ラナイヤウナ状態ヲ目標トシ、ビルケー氏反應ノ陰性ヨリ陽性



第三表 ビルケ―氏反應第二回試驗成績

總數	病期					患者數	第一回ヨリ著明トナルモノ	第一回ト相等シキモノ	第一回ヨリ減弱セルモノ
	一期	二期	三期	良	不				
七六	一三	二七	三六	五四	一二	二六	〇	二	一五
二六	三	一一	一一	二七	二	三五	二	二	〇
三	〇	一	一	四	二	一	二	二	四
一〇	〇	四	一	四	六	一	二	二	四

リマス。

故ニ斯ル患者ニ於テハ嚴重ニ身體ノ安靜ヲ守ラシメマスト、心臟、肺臟ガ安靜トナリ病竈ニ於ケル血行ガ減ジ、病竈カラ毒物ガ多量ニ循環系ヘ流レ入ルヲ防ギマスカラ、病竈周圍ノ細胞ヲ中毒ヨリ免レシメル譯デアリマス。尙ホ其外全身細胞ヲ中毒ヨリ救ヒテ其機能ヲ良好ナラシメ、間接ニ肺細胞ニ良影響ヲ與ヘルトイフコトモアリマセウ故ニ全身症狀ノ著明ナ患者ニ於テハ特ニ安靜ヲ肝要トシマス。

之ニ反シ局所反應ノ著明ナルハ結核毒ト體細胞ノ間ニ劇シキ闘ノ行ハレテ居ル實況ヲ炎症トシテ目前ニ見ルモノダト解スルコトガ出來マス。即チ體細胞ガ強イ防禦力ヲ現ハシテ居ルモノダト見ラレマス。故ニ病勢ガ進ムニ連レテビルケ―氏反應、穿刺反應等ノ局所反應ハ次第ニ減弱スルモノデ前掲第三表ニ於テモ之ヲ見ルコトガ出來マス。此關係ハ逆ニ斯ル狀態ニ在レバコソ病勢ガ進ムノダト解スルコトモ出來マス。故ニ此局所反應ノ減衰ヲ來スコトナキヤウ、又ハ却テ之

肺結核患者ノ發熱其他ノ全身症狀ハ種々ナ原因デ起リマセウガ、其主要原因ノ一ツトシテ我々ハ之レヲ天然ノ「アンチゲン」即チ肺結核ノ病竈ヨリ流出スル結核毒ニ對スル反應ト見ルコトガ出來マス。即チ肺結核患者ニ人工「アンチゲン」タル「ツベルクリン」ヲ注射シテ發熱其他ノ全身症狀ヲ起シタル場合ニ比適スベキモノト見ルコトガ出來マス。而シテ此反應ノ起ル所以ノ説明ハ種々ニサレテ居マス。例ヘバ抗體生産能力以上ニ結核毒ガ出テ、抗體ニ優ル爲ニ免疫上ノ調節ガ破レタモノデアルト云ヒ、或ハ「ツベルクリン」ヲ迅速且ツ完全ニ分解シテ無毒ナモノトナストイフ能力ガ減ジテ居ルトキ其中間產物ガ出來テ、ソレガ「アナフィラトキシ」トシテ働クニ因ルモノダトモ云ハレマス(23)。其説明ハ何レニシテモ兎ニ角細胞ノ力ガ毒物ノ害力ニ比較シテ劣テ居ルニ因ルモノデア

レヲ昂上サスルヤウニ仕向ケルコトガ出來マスルナラバ治療上ノ大ナル勝利ト見ルコトガ出來マセウ。

肺ノ病竈ニ於テモ病竈周圍ノ細胞防禦ガ強イカ又ハ毒ガソレニ比シテ弱ケレバ病竈ハ治療ニ向ヒ、ソレノ逆ノ場合ニハ細胞ガ次第ニ毒ニ負ケテ病竈ガ増大スルモノト見ルコトガ出來マセウ。否ザレバ増大スル筈ハアリマセン。故ニ病竈周圍ノ細胞ガ毒ニ負ケナイヤウニ手加減ヲ加ヘテ行クコトハ治療上ノ著眼點ノ一ツデナケレバナリマセン。

一般ニ結核患者ハ體細胞ナリ局所細胞ナリガ結核毒ニ負ケテ居ル状態ニ在ルモノト見マスレバ、毒ヲ多ク流出サスルト危険デアルカラ身體安靜ニ依テ毒ノ流出ヲ防グト云フコトハ最モ肝要ナ第一手段デナケレバナリマセン。併シ其後次第ニ毒作用ガ減ジ細胞ガ餘力ヲ有スル状態ニナツテ來タトスレバ、之レニ對シテ更ニ細胞能力ノ高マルヤウニシテヤルトイフ工夫ハナイモノデセウカ。コノ爲ニハ他ノ症狀ノ許ス限リ相當積極的ニ運動其他ノ適當ナル刺戟療法ヲ行フトイフコトモ有效デアリマセウ。局所反應ヲ強クスル爲メニハ「ツベルクリン」使用ヨリモ全身療法ノ方ガ良イトイフコトハ最近ニモ *Bessau* 氏ナドガ書イテ居リマス。

以上ノ如ク考ヘマスルト局所反應ノ強弱ト皮下注射ニ依ル全身反應ノ強弱トノ關係ハ積極的療法實行上ノ一ツノ目標トナシ得ルモノト考ヘマス。即チ前者ガ強クテ後者ガ起ラナイヤウナ患者ニハ他ノ症狀ガ許スナラバ相當積極的ニヤツテ可イモノト思ヒマス。但シ實地上ニハ必ずシモ一々皮下注射ヲ行ハナクとも、全身症狀ヲ以テ天然「アンチゲン」ニ對スル全身反應ト見做セバソレノ有無強弱ト「ツベルクリン」ノ局所反應トカラ相當ノ見當ハツキマセウ。「ツベルクリン」反應ノ強弱ハ必ずシモ一律ニハ行カナイモノデアルカラ、固ヨリ比較的ノ話デハアルガ、如上ノ見解ニ依テ又現在實行中ノ療法ガ果シテ患者ノ免疫能力ヲ高メツ、アルヤ否ヤヲ判斷スルコトモ可能デアリマス。

ビルケー氏反應又ハ之ニ類似ノ局所反應ハ全身ドコニカ結核ガアルトイフコトヲ示ス以外病竈ノ位置モ病期モ示スモノデナイトイフガ普通ニイハレテ居ル所デアリマスガ、病竈ニ就テハ多クヲ語ラナクとも病竈ヲ有スル個體ノ状態ニ就テハ相當ニ能ク之ヲ現ハスモノト考ヘラレマス。故ニ此個體ノ状態トイフコトニ重キヲ置ク一般療法ノ立場カラハ之ヲ一ツノ目標トナシ得ル譯デアリマス。

併シ實際ニ積極的療法ヲ講ズルヤ否ヤニハ固ヨリ他ノ病狀ヲモ顧ミテ、ソレノ許ス限リ行ハチバナラナイコトハ固ヨリデアリマス。咯血、心臟血管系ノ強弱、結核病竈ノ型及ビ混合感染如何等ハ積極的療法實行ニ大關係ヲ有スルモノデア  
ルガ、ソレハ必ズシモ「ツベルクリン」ノ局所反應ト平行スルトイフ筈ハナイカラデアリマス。

安靜休養ハ肺結核治療ノ最大眼目デア  
ルガ、積極的ニ運動其他ノ刺戟療法ヲ行フコトモ亦極メテ重要デアツテ、安靜カラ運動ニ移ル際ノ諸注意、殊ニ運動ノ分量ヲ定メルトイフコトハ肺結核療法中ノ最モ難事トスル所デア  
ルカラ、嚴重ナ「コントロール」ヲナサチバナリマセン。コノ爲少シデモ實地上ノ參考ニナル事項アラバトイフ考カラ一ツノ意見トシテ述ベタノデアリマス。「ツベルクリン」反應ノコトハ六ケシイノデ何レ尙ホ多數例ノ試験ノ上改メテ御報告致シマス。

結核患者ノ「ツベルクリン」反應ヲ精細ニ考察シヤウトスルト、結核菌ノ菌株如何ガ、「ツベルクリン」反應ノ強弱ニ幾分ノ相違ヲ起スコトナキヤハ一顧ヲ要スル問題ト考ヘラレマス。其參考トシテ矢部升君ガTY菌カラ作ツタ所謂TY「ツベルクリン」デ行タピルケー氏反應ノ成績ヲ掲ゲテ置キマス。之ガ對照トシテ又普通ノ「ツベルクリン」及ビ他菌ヨリ(コ  
コニハ肺放線狀菌症患者ヨリ分離セル放線狀菌ヲ用フ)舊「ツベルクリン」ノ製法ニ從テ製シタル液ヲ以テ同一試験ヲ肺結核患者ニ就テ行ヒマシタ。其成績ヲ見ルト他菌液デモ極ク弱キ(食鹽水ヨリハ稍、明カナ)陽性的反應ヲ呈スルコトガアリ  
マスガ、TY「ツベルクリン」デハ、ソレヨリハ比較的著明ナ反應ヲ現ハシマシタ。併シ普通ノ結核菌ヨリハ遙ニ弱イ反應デ、又陽性率モ遙ニ少イモノデアリマス。

第 四 表

對照	卅	廿	十	士	一
Tub	九	一四	一三	二	三
TY			一三	二	八
Ac			六	二	三
				五	四
					六

備考

Tubハ舊「ツベルクリン」、TYハ「ツベルクリン」。  
Acハ肺放線狀菌症患者ヨリ分離セル病原性「Valt-Isaac」型ノ放線狀菌ノ「グリセリン」肉汁四週間培養ノモノヨリ舊「ツベルクリン」製法ニ倣ヒ製出セルモノ假リニ Actinomyces ト命名ス。TY及Acニ於ケル弱陽性(+)ハ對照ニ比シテハ稍、大ナル丘疹ヲ作りタルモノナレドモ「Tub」ノ弱陽性(+)ニ比シテハ弱キモノヲ含ム。  
Actinomycesニ對シテ極弱キ陽性ヲ示セルモノアルモ略痰ニ結核菌ヲ證明シ難キ場合ニ多シ。然レドモ又他ニソノ患者ニ就キテ放線狀菌症タルコトヲ斷言シ得ベキ根據ナシ。

## 檢 溫

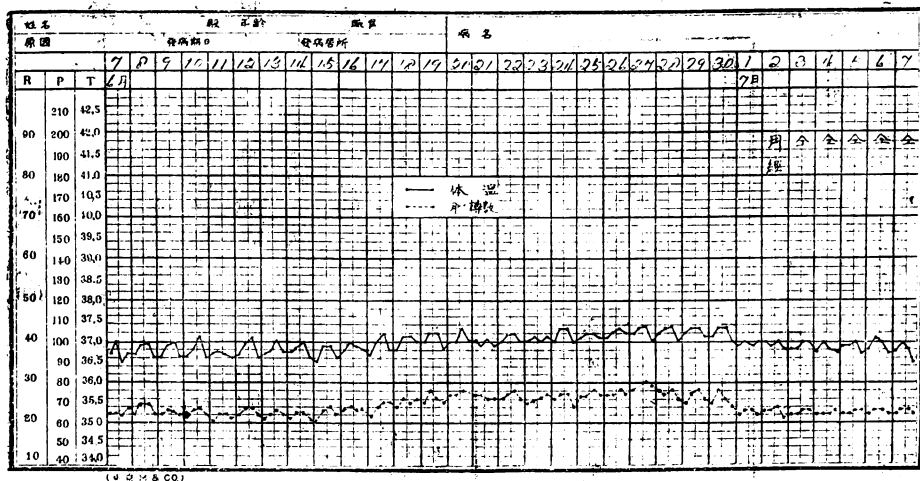
安靜ト運動ノ別ヲ定ムル最モ重要ナル標準ハ體溫デアリマス。精細ナ觀察ヲ行フニ當テハ體溫ハ直腸檢査ヲ行ハテ不安心デアリマス。腋窩溫度ト直腸溫度トハ正シク平行シナイ場合ノ方ガ多イ位デアリ而カモ直腸ノ方ガ敏感ニ現ハル、モノ故、直腸檢溫ヲ殊ニ必要トシマス。米國デハ華氏檢溫器ヲ用ヒテ、口腔ニテ檢溫スルガ通常デアリマス。直腸ノ檢溫ニ就テ健康看護婦九十四人ニ就キ百六七十回反復檢査シテ比較研究セル成績ヲ表示スレバ左ノ通りデアリマス。之レハ起牀前ト就寢後十五分以後トノ兩時刻ニ於テ測ツタモノデアリマス。之レニヨレバ通常深サ二寸、時間五分間ニテ實用上ノ目的ニハ先ヅ適當ト考ヘマス。時間二分間又ハ十分間トスルモ、或ハ深サ三寸トスルモ、其差ハ平均凡ソ〇・〇五分ニ過ギマセン。故ニ時ニハ時間ヲ二分間トシテモ可イデセウ。

第五 表 健康者直腸檢溫表(看護婦九十四名ニ就テ)

深サ及 挿入時間		深サ二寸、時間五分間ニ比シテ	
		高	低
二寸、五分間	同 數	平均(度)	同 數
二寸、十分間	一六九	〇・〇四	一六七
約三寸、五分間	一七〇	〇・〇二	〇・〇五

深サ及 挿入時間		深サ約三寸、時間五分間ニ比シテ	
		高	低
約三寸、二分間	同 數	平均(度)	同 數
約三寸、十分間	一六六	〇・〇五	一六一
約三寸、五分間	一六六	〇・〇五	〇・〇四

體溫ノ上ニテ 注意スベキ事項ノ一ツトシテ婦人ニ在テハ月經トノ關係ヲ顧ミテバナラヌコトハ固ヨリデアリマス。妊娠、月經等ハ感冒ト同ジヤウニ結核ニ對スル抵抗力ヲ弱メルトイフ説ト相參酌シテ考ヘルト興味アル問題ト思ヒマス。左ニ一例トシテ毎月月經前ニ發熱セル一患者ノ體溫表ヲ掲ゲテ置キマス。診斷ニ當テ無熱期ニ輕卒ニ失シテモナラズ、治療ノ上ニテ有熱期ニ警戒ヲ怠テモナラナイ所ノ事實ト考ヘルカラデアリマス。



### 患者ノ運動量ニ就テ

患者ノ運動量ヲ定ムルニ就テ重要ナモノハ日課表デアリマス。今二例ノ表ヲ供覧シマス(印刷省略)。

患者ノ運動量中第一ニ考慮スベキモノハ、患者ガ必然ノ用足シニ要スル時間ダケドレダケニナルカラ定メルコトデアルト考ヘマス。東京市療養所ハ施療患者ノミデ附添人モ甚少ク從テ重症者ナラザル限り、便所、食堂へ入ルコト、洗面所へ行クコト等ノ普通ノ用事ハ銘々自分デ足シテ居リマス。之レガ總計デドノ位ニナルカラ調査シマシタ處平均一時間半前後トイフガ多クアリマス。少イノハ一時間十分、多イノハ一時間四十四分ニナツテ居リマス。之レハ病室ガ大キイノデ自然ニ斯ク多クナルノデアリマシガ、兎ニ角患者ノ日課中カラ之ヲ看過スルコトハ出来マセン。

此表ハ二月下旬ノ寒冷季節ニ於テ療養所在所患者七百四十餘名ニ就テ調査シ、答申者百八十三名ノ中記載不確實ナルモノ若干名ヲ省キ、他ノ患者中經過良好ニテ、運動ガ障碍ヲナシツ、アル如ク見エヌ者六十五名ヲ選ンデ合計シタモノデアリマスガ、此自分ノ用足シノ外ニモ規定ノ散歩ヲシタリ、プラムシテ居タリ又ハ雑用ヲシタリスル時間ヲ合計スルト、一期二期患者デハ脚ノ運動ガ總計五時間餘ニナツテ居リ、三期患者デハ四時間前後ニナツテ居リマス。コノ中ニハ、三十七度臺ノ熱ガアツテモ運動ヲシテ居ルモノガ二十一名アリマスガ、是等ノ患者ニ就テハ實ハ一々ニ説明ヲ要

第七表 患者運動時間調査表

病期	體溫	運動別	便所		下肢ノ運動總計		上肢ノ運動總計	
			洗面	食堂	人數	時間分	人數	時間分
第一期	三十六度壱		一六	一一	一六	五五八	一三	一四八
	三十七度壱		一六	一〇	六	五三七	五	二二〇
第二期	三十六度壱		一九	一三	一九	五三九	一七	一四四
	三十七度壱		七	一三八	七	五一九	五	一一三
第三期	三十六度壱		九	一四	九	四四三	八	一三六
	三十七度壱		八	二四	八	三二八	三	一一四

難ダカラ、甚ダ精細デナイモノト見子バナリマセンノデ、參考ノ爲メ省カナイデ置イタトイフニ過ギマセン。  
運動ノ後ノ體溫ノ變化ヲ見ルタメ散歩及入浴ニ就テ調査シマシタ。

散歩

結核患者デハ運動後ノ體溫上昇ガ著シイトイフコトハ固ヨリデアリマスガ、ドノ位ノ程度ノ患者デドノ位ナ運動ヲスルト、ドノ位ノ體溫上昇ガアツテ、ドンナ經過ヲ取ルモノダトイフコトニ就キ、大體ノ見當ヲツケテ置クコトハ結核ノ診斷ヤ患者ノ運動量判定ノ上ニ有益ナ事項ダト考ヘラレマス。此運動熱昇降ノ状態ヲ檢スル目的ニハ散歩後ノ檢溫ヲ嚴密ニ行フヲ最モ適當トセラレテ居マス。第八表ハ此目的デ寺尾君ノ病舎ニ於テ檢シタ一成績デアリマス。固ヨリ此檢査成績ハ患者ノ病狀次第種々ニ變ズル譯デアリマスガ、同表ノ患者ハ第一期五名、第二期十二名、第三期三名デアリマス。熱型デ分ケルト大體平溫デアルガ時々三十七度一、二分迄至ルコトアル者十四名、三十七度以下ノミニ止ルモノ六名ニテ、其中十三名ハ數ケ月前ヨリ此ノ状態ニ在ルモノ、残り七名ハ最近ニ此状態トナレルモノデアリマス。運動トシテハ試験的ニ平素ヨリハ餘程大ナル努力ヲ課シテ見タノデアリマスガ、併シ何レモソノ運動ガ危險ト豫想サレナイ程度ノ患

者デアリマシタ。此時ノ運動ハ七月上旬ニ二日間繼イテ毎朝五時四十分ヨリ主トシテ森林中ヲ一時間(前日三十二丁翌日三十八丁)看護婦引率ノ下ニ散步セシメタノデアリマス。尤モ少シデモ無理ニナリソウナノハ中途デ中止スルコトニサセテオキマシタカラ、四人ダケガ三十分デ少シク脚ノ疲労アリシタメ中止シマシタ。此試験ノ成績ハ表デ御覽ヲ願ヒマ  
 スガ、直腸檢温成績ヲ綜合シマスト、散步直後ニハ每例必ズ體温ノ上昇ヲ來シ、最大一・二度最小〇・三度四十例平均  
 〇・七二度(攝氏)上昇シ、其ノ後ハ一例ノ外凡テニ於テ漸次下降シテ居マスガ併シ其下降ハ健康者ヨリハ餘程遅クアリ  
 マス。腋窩檢温ニ於テハ運動直後ノ體温上昇ノ現ハレ方ガ直腸檢温ヨリハ甚少クアリマス。

第八表 患者散步後ノ體温脈搏數表

二) 温檢高腋		(例十四) 温檢腸直				散步 直後 ヨリノ 時間		上昇又ハ増加セル例數				全患者體温 (攝氏)又ハ 脈搏平均値 ノ直前トノ 差 (最大) (最小)		
十五分—二 十分	直後—五分 間	一時間—一 時間五分	三十分—三 十五分	十五分—二 十分	直後—五分 間	直後ニ於テ直前 ト變ハリナキ例 數	直前ヨリ上 昇又ハ増加 セル例數	直後ヨリ却 テ上昇又ハ 増加セル例 數	直後ヨリハ 降下又ハ減 少セルモ直 前ヨリハ尙 高キ例數	直後ト變ハ リナキ例數	直前ノ状態 ハマテ降下 シタル例數	中掲諸例 ノ直前ヨ リ却テ降 下又ハ減 少セル例 數	上掲諸例 ノ外直前 ヨリ却テ 降下又ハ 減少セル 例數	〇・七—三 〇・三—昇
	他(一ハ後ニ昇リ 一ハ昇リテ降 ル)ハ引續キ降下				四〇									〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
	一二													〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
			一	二										〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
		二八	三八	三七										〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
														〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
														〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
		八												〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
														〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
														〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三
	四 ←													〇・八—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三 〇・九—〇・一 〇・七—〇・九 〇・五—〇・七 〇・三—〇・五 〇・一—〇・三



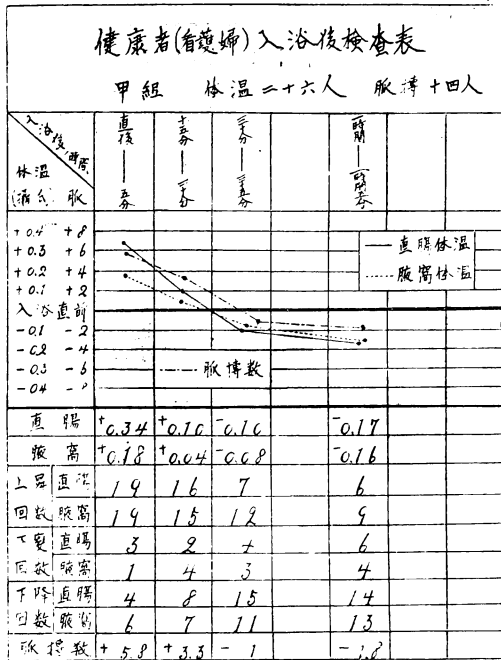


入浴

健康者ニ對スル入浴ノ作用ニ就テハ多クノ記載ガアリマスガ、今ソガ體溫ニ及ボス影響ニ就テ、東京市療養所ノ看護婦八十九名ニ就キ各一回宛検査シマシタ成績ヲ綜合シマスト左ノ通りデアリマス。之ハ患者ニ就テ入浴ノ影響ヲ檢シマサル上ニ、重要ナ基礎トナル事項デアリマスカラ、明瞭ナ觀念ヲ得ル爲ニ特ニ調査シタモノデアリマス。

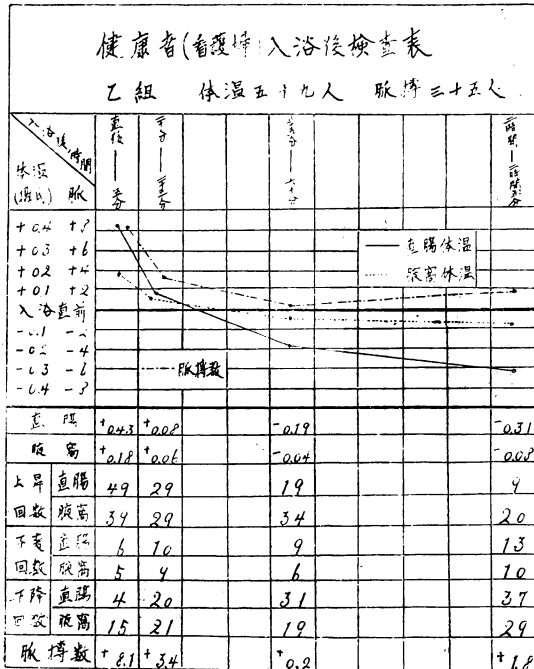
入浴直後ニハ體溫ノ上昇セルモノガ多ク、其度ハ平均直腸甲組〇・三四乙組〇・四三ニナツテ居マスガ甲乙八十五人ヲ合併スルト〇・四一ニナリ、腋窩デハ甲乙共平均〇・一八デアリマス。ソノ後ハ漸次下降シ三十分後、一時間後及二時間後ニ於テハ入浴前ニ比シテ却テ下降セル者ガ多ク、殊ニ直腸檢溫ニ於テ明カデアリマス。入浴ヲ體溫ヲ下ゲル目的ニテ利

第九表 甲



備考 體溫ノ十八上昇一ハ下降ヲ示ス

第九表 乙



備考 體溫ノ十八上昇一ハ下降ヲ示ス

用スルコトアリト云ハレテ居ルノハ、此ノ關係デアラウト思ヒマス。但シコ、ニ直後トシマシタノハ眞ノ入浴直後デハナク、浴室ヨリ寄宿舎マデ(距離約半丁)歸テ、著後直ニ檢シタノデアリ、十五分後、三十分後等モ其歸著時カラ起算シタモノデアリマス。ソシテ今年二月ノ寒季ニ於ケル檢査デアリマス。

第十表ハ寺尾君ノ病舎ノ患者デ幾度ニモ行ツタ成績デアリマス。

患者ハ前記ノ散歩ノ例ト同一デアリマスガ、次ノ表ハ日々同ジ時刻ニ入浴シタ患者ノ中翌日毎三時ノ直腸檢温マデ完全ニ行ハレタ十名ヲ選ンデ表示シタノデアリマス。此患者ハ第一期四名、第二期六名、熱型デハ大體平温デアルガ時々三十七度一、二分ニ達スルコトアルモノ八名、引續キ三十七度以下ノミニ在ル者二名、此中數ヶ月前ヨリ此ノ状態ニ在ル者六名、最近斯クナレル者四名デアリマス。七月中旬ニ檢シタモノデ、午前十時ヨリ入浴セシメ、入浴時間ハ約十四分乃至二十分間ニテ患者自身ニ洗ハシメタノデアリマス。湯ノ温度ハ四十二度デ、舉止ヲナルベク緩徐ニセシメマシタガ、其他ハ普通ノ入浴デアリマス。直前體温ハ浴室(病舎ヨリ約二丁)ニ到テ十五分間又ハ三十分間休憩セシメタ後ニ測ツタモノデ、直後、十五分後三十分後、一時間後等ノ檢温モ浴室ニ於テシ、ソレヨリ病舎ヘ歸テ三時間毎ニ三回檢シ、翌日モ朝六時ヨリ三時間毎ニ直腸及腋窩體温ト脈搏ヲ檢シテ影響如何ヲ見タノデアリマス。乙組ハ二月下旬ニ於テ前者ト略同一ノ條件ノ下デ檢シタモノ、丙組ハ十二月ニ行ツタ試驗デ檢温ハ凡テ病舎ニ於テシタノデアリマス。即チ直前、直後ハ病舎ヲ去ル時及病舎ヘ歸ツタ時ノ意味デアリ、其他ノ時間モ病舎ヘ歸ツテカラノ時間デアリマス。入浴後ノ體温ハ上記甲乙丙何レモ大體健康者ヨリハ上昇ガ多クシテ下降ガ遅ク且少クアリマス。而シテ健康者ト同様ニ直腸ニ於テ體温上昇ガ殊ニ著シクアリマス。脈搏數モ直後ニハ増シテ居ルガ、終ニハ減ジテ居リマス。甲表ノ各患者ニ就テ上記ノ如キ一時間後ノ觀察ノ外、翌日ノ夜迄ノ毎三時間ノ直腸温、腋窩温及脈搏數ヲ見マスルノニ平素ニ比較シテ著シキ上昇ハ現ハレテ居マセン。寧ロ多少ノ下降ノ傾キガアリマシタ、一昨年佐々虎雄君ガ雜誌結核ニ發表シマシタ入浴問題ニ於テモ、日常ノ腋窩檢温ノ温度表上カラ觀察シタ多數ノ患者ノ體温脈搏ノ經過ハ入浴ノ惡影響ヲ殆ド著目セシメマセンデシタ。之レモ前ニ散歩ノ條ニ述バタト同様ニ大ニ注目スベキ點デアリマス。

第十表 甲 患者入浴後ノ體溫脈搏數表

(例十)數搏脈			(例十)溫檢高腋			(例十)溫檢腸直			入浴後 直後 ヨリノ 時間	直後ニ於テ リナキ例數 ハ	直前ヨリ上 昇又ハ増加 セル例數	直後ヨリ更 ニ上昇又ハ 増加セル例 數	直後ヨリハ 降下又ハ減 少セルモ直 前ヨリハ尙 高キ例數	直後ト變ヘ リナキ例數	直前ノ狀 態又ハ降下 シタマハ ル例數	入浴直前ヨ リ却テ降下 セリ又ハ減 少セル例數	全患者體溫 (攝氏)又ハ 脈搏數平均 ノ差 直前ト 直後ト (最大) (最小)
三十分—三十五分	十五分—二十分	直後—五分間	分一時間—一時間五	三十分—三十五分	十五分—二十分	直後—五分間	分一時間—一時間五	三十分—三十五分									
		一								一〇							
		九				九											
	三		三	六	五		一	五	八								
				一	二												
四	三		三	一			四	二	二								
六	四		四	二	二	一	五	三									
(六二) (二二) (減減)	(四六) (二四) (減增)	(〇二) (二八) (增增)	(〇〇) (〇七) (降昇)	(〇〇) (〇六) (降昇)	(〇〇) (〇七) (降昇)	(〇〇) (〇二) (降昇)	(〇〇) (〇四) (降昇)	(〇〇) (〇二) (降昇)	(〇〇) (〇一) (降昇)	(〇〇) (〇五) (降昇)	(〇〇) (〇三) (降昇)	(〇〇) (〇四) (降昇)	(〇〇) (〇二) (降昇)	(〇〇) (〇一) (降昇)	(〇〇) (〇六) (降昇)	(〇〇) (〇三) (降昇)	(〇〇) (〇九) (降昇)

一時間—一時間五分										九・四減 (一八減) (六減)
-----------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	-----------------------

第十表 乙、丙 患者入浴後ノ體溫脈搏表

浴後ノ時間	乙組、浴室ニテ檢温セシモノ				丙組、浴室ヨリ病舎ヘ歸テ檢温セシモノ			
	人數	直腸溫平均	腋窩溫平均	脈搏平均	人數	直腸溫平均	脈搏平均	
直後	一九	〇・四三(昇)	〇・一二(昇)	八・〇(增)	一〇	〇・六(昇)	七・四(增)	
二十分—二十五分	一九	〇・〇五(昇)	〇・〇一(昇)	〇(増減)	一〇	〇・一二(昇)	〇・一(増)	
五十分—一時間	一一	〇・〇四(降)	〇・〇二(昇)	〇・七(減)	一〇	〇・〇九(降)	〇・一(減)	
一時間五十分— 二時間五十分— 三時間	六	〇・〇二(昇)	〇・〇七(昇)	一・三(減)	一〇	〇・二〇(降)	〇・一(減)	
	六	〇・〇八(昇)	〇・一〇(昇)	一・六(增)				

備考。乙組ニ於テハ十九人中七人ハ二十分後ニ於テ略々舊ニ復シタル爲メ爾後ノ檢査ヲ省略シ一時間後ニ於テ、更ニ六人奮ニ復シタル故省略セルモノ、平均ナリ故ニ一時間以後ノ意味他表ト異ナル。

散步ニシテモ入浴ニシテモ日常ノ腋窩檢温ノ溫度表上ニハ別ノ不良影響ヲ忽チニシテ認メシメルトイフコトハ殆アリマセンガ、直後檢温殊ニ直腸檢温ニ於テハ著明ナ變化ノ起ルコトハ前述ノ通りデアリマス。故ニ之レハ單ニ一時的ノ生理的現象ガ著明ニ現ハレルトイフニ過ギナクシテ、永續的作用ヲ有スルモノデハナク、又結核病竈ニハ關係ガナイモノトスレバ運動ヤ入浴ハ半面ニハ種々有益ナ理由ヲモ有スルコトデアルカラ、之ニ對シテ餘リニ消極的ノ方針ヲ取ラナイ方が可イコトトナル。之ハ事實又相當ノ運動モシ、入浴モシテ居ル患者デ、治癒又ハ輕快退所ヲナス者ヲ見レバ明カナ譯デアアル。然ルニ又他面ヨリ考フレバ、上記ノ如キ發熱ヲ起ス運動又ハ入浴ハ急ニ溫度表ノ表面ニハ現ハレナクトモ、陰然タル災ヲ及ボシ、積リ積テ全體ノ經過ノ上ニ幾分ナリ不良影響ヲ與フルモノ(治癒遷延等)トスレバ此發熱ヲ看過シテ運動ノ分量、入浴ノ可否等ヲ判斷スルコトハ出來ナイ譯デアアル。故ニスル判斷ニ當テハ直後體溫殊ニ直腸溫ノ經過ヲ能

ク觀察シテ各病例毎ニ考察スルコトガ完全ナ方法デアリマス。

### 精神感動ノ影響

安靜休養トイフ上ヨリイヒマス、身體各臟器就中筋肉ノ安靜ハ固ヨリ肝要デアリマスガ、同時ニ精神ノ安靜ガ極メテ必要デアリマス。今回東京市療養所ノ患者三一三人ニ就テ調査シマシタ精神感動影響調査表ヲ左ニ掲ゲテ見マセウ。

第十二表 精神感動影響調査表

調査事項 區別	食		慾		血略、血痰		體		溫		其他ノ徵候	
	不	振	亢	進	出	增	上	下	良無 又障 ハ碍	不	真	不
悲哀 心配 ノ後	一三三	五	二二	四	一	二	一三三	五	七	一	二	二四
喜ビ 慰ミ ノ後	二九	七九	六	四	二	四	五五	一八	六九	一	三	三四
怒 ノ後	四七	八	八	三	七	一	七一	六	一	一	五	三八
精神 的 事 ノ後	三八	二四	七	二	八	一	八五	四	二〇	一	七	七一
談話 ノ後	二六	三一	五	一〇	九	二	九二	四	三四	六	五	六五

一月一五〇人二月二四九人(内八六人ハ一月モ記載セルモノ)計三一人精神感動ノ度毎ニ氣ノツキタル事項ノミヲ記載セシメテ之ヲ取纏メタルモノ

ルコトモ少クアリマセン。

第十三表カラ第十六表迄ハ佐々虎雄君ノ調査シタ各種運動遊戯直後ノ檢溫成績カラ、體溫上昇下降ノ回数ヲ纏メタモノデアリマスガ、精神の仕事を筋肉運動ノ比較ヲ見ル爲ニ茲ニ掲ゲテ置キマス。表中ノ腋窩溫ハ直後ノ檢溫デ、直腸溫ハ腋窩檢溫五分間ノ後、五分間休息、其後直ニ同一ノ檢溫器ヲ以テ三分間檢シテ得タルモノデアリマス。

上表ニ據レバ精神感動ノ中デハ、悲哀、心配等ハ最有害デ、食慾不振、體溫上昇、其他各種ノ不良徵候ヲ來シマス。次デ不良徵候ノ多キハ精神的工作、次デ怒リデアリマス。喜ビ、慰ミノ後ニハ食慾亢進其他ノ良徵モアリマスガ、體溫上昇ノ如キ不良影響モアリマス。又單純ノ精神の感動トハ違ヒマスガ、談話ノ後ニハ熱ノ上ル者ガ可ナリ多ク嗜血、血痰ノ起

圍碁ノ後ニハ體溫ノ上昇スルモノガ多イ。之ハ各病期ヲ通ジ、又熱候ノ有無及多少ノ高下ニカ、ハラズ等シク認メラレ  
ル所デアリマシテ、恰度散歩ニ因ル體溫上昇ノ頻度ト殆ド同ジ成績デアリマス（但上昇度ノ大小ノ比較ハマダ纏メテア  
リマセン）其他讀書、繪畫、將棋等ノ如ク精神的ノ働キノ大ナルモノデモ、「ピンボン」「羽根ツキ」「凧揚ゲ」等ノ如ク身  
體的運動ノ主ナルモノデモ、亦其中間ノ「トランプ」「カルタ」等デモ其間ニ大ナル差違ハ認メラレマセン。

第十三表 散歩後檢溫表

病期體溫別	調査事項		人員總回數	腋		高		直		腸	
	一期	二期		同上數	同不數	同降數	同上數	同不數	同變數	同降數	同上數
一期	二	二	七	六	一	〇	〇	五	一	一	一
二期	二	七	七	五	二	〇	六	六	一	〇	一
三期	八	六九	八三	五三	七	九	六〇	七	一	二	二
計	二二	八三	一〇五	六四	一〇	九	七一	九	七	三	三
三十六度	二	八三	八三	六四	一〇	九	七一	九	七	三	三
三十七度	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三十八度	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

第十四表 圍碁後檢溫表

病期體溫別	調査事項		人員總回數	腋		高		直		腸	
	一期	二期		同上數	同不數	同降數	同上數	同不數	同變數	同降數	同上數
一期	二	二	一九	一六	三	〇	一五	二	二	二	二
二期	二	八	一〇	六	〇	二	七	〇	一	一	一
三期	四	三九	四三	三二	四	三	三二	五	〇	二	二
計	八	四六	六六	五四	七	五	五四	七	五	二	二
三十六度	七	六四	六四	五三	七	四	五三	七	五	二	二
三十七度	一	二	二	一	〇	一	一	〇	〇	一	一
三十八度	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

第十五表 各種遊戯運動後檢溫表

病期體溫別	調査事項		人員總回數	腋		高		直		腸	
	一期	二期		同上數	同不數	同降數	同上數	同不數	同變數	同降數	同上數
一期	一〇	五	一五	四五	一〇	一	四七	五	四	四	四
二期	一〇	五	一五	四五	一〇	一	四七	五	四	四	四
三期	一〇	五	一五	四五	一〇	一	四七	五	四	四	四
計	三〇	一五	四五	一三五	三〇	三	一四一	一五	一二	一二	一二
三十六度	二	八	一〇	二六	二	一	二九	二	二	二	二
三十七度	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三十八度	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

第十六表 各種運動遊戯後檢溫總計表

病期體溫別	調査事項		人員總回數	腋		高		直		腸	
	一期	二期		同上數	同不數	同降數	同上數	同不數	同變數	同降數	同上數
一期	二	二	一九	一六	三	〇	一五	二	二	二	二
二期	二	八	一〇	六	〇	二	七	〇	一	一	一
三期	四	三九	四三	三二	四	三	三二	五	〇	二	二
計	八	四六	六六	五四	七	五	五四	七	五	二	二
三十六度	七	六四	六四	五三	七	四	五三	七	五	二	二
三十七度	一	二	二	一	〇	一	一	〇	〇	一	一
三十八度	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

計	讀書	繪畫	將棋	「カルタ」	「ランブ」	「トランプ」	「ストーブ」	「ストーブ」	「ストーブ」	洗濯	庭ノ手入	風揚ゲ	羽根ツキ
四二	一	一	四	五	一	三	二	二	二	九	二	一	七
一一七	一	四	九	七	二	七	四	四	一六	一六	三	五	二二
九〇	一	二	八	四	〇	四	四	四	一五	一五	三	四	一八
八	〇	〇	〇	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	二
一九	〇	二	一	二	二	二	〇	〇	一	〇	〇	〇	二
一〇五	〇	三	八	七	二	五	四	四	一五	三	五	五	二〇
七	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二
五	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇

三十八度	三十七度	三十六度	計	三期	二期
一	五	五六	六二	三九	一三
一	七	二五八	二六六	一七〇	四〇
一	五	二〇二	二〇八	一三七	二六
〇	〇	二五	二五	一二	三
〇	二	三七	三三	二一	一一
一	六	二二二	二二九	一四八	三四
〇	〇	二四	二四	一六	三
〇	一	一一	一一	六	三

以上ノ諸成績ニ依テ精神的感動又ハ精神的ノ仕事ハ熱其ノ他ノ徵候ニ對シテ不良ノ作用ヲ及ボスコトハ意外ニ大デアアルトイフヲ知ルコトガ出來マス。

以上ハ最近ノ一、二ノ調査故特ニ茲ニ掲ゲタニ過ギマセンガ、要スルニ各種方面ノ調査又ハ日常ノ經驗ハ益々吾人ヲシテ病狀乃至體力ニ比シテ大ニ過グル身心ノ勞苦ガ實ニ恐ルベキ惡影響ヲ結核病ノ消長ニ及ボスモノデアアルコトヲ信ゼシメマス。而シテ一面ニハ今日東都ニ於ケル我國ノ學生ニ結核性發熱者ノ意外ニ多キ事實ヲ目撃シマスノデ、試験萬能主義ヲ中心トシテ學課ノ勉強ヲ強ヒツ、徒ニ身體運動ヲ獎勵シ、休養ニ意ヲ致スコト少キ教育ノ弊害ガ痛切ニ感ゼラレマス。私ハ機會アル毎ニ之レヲ論ズルニ努メテ居マスノデ敢テ茲ニモ一言致シテ置キマス。

正誤 第十二表ニハ各精神感動回數ノ欄脱漏ス。即悲哀心配四三〇回、喜ビ慰ミ四二〇回、怒四一八回、精神的仕事四一六回、談話四一八回ノ中其影響ノ氣付キタル回數ヲ同表ニ舉ゲタルナリ。

## 開放大氣療法ニ就テ

昨年ノ日本結核病學會總會演說大意及追加

(寺尾殿 治共述)

### (一) 緒言

我國ニ於テハ開放療法ガ一向ニ行ハレテ居ナイ爲メ東京市療養所ニ於テモ開所以來大ニ之レガ勵行ニ努メ、最初ハ種々ナ非難モ受ケマシタ。我國ニ於テ開放療法ヲ實行シ難イトイフ理由トシテ多ク舉ゲラル、所ノモノハ空氣ノ濕度ノ高イコトデアリマスガ、之レニハ一應尤モト思ハル、理由モアリマスノデ、一昨年以來我々ハ此點ヲ徹底的ニ解決シヤウト企テタノデアリマス。我國ニ於ケル肺結核療養問題デハ第一ニ決セテバナラナイ實地問題デアルカラデアリマス。

東京市療養所ノ從來ノ病棟ニハ室前ノ靜臥用廣縁ガアリマセンノデ、各病室ノ窓ハ出來ル丈ケ多クシテ且ツ一々廻轉窓ヲ付ケテアリマス、ソレデ最初カラ此廻轉窓ハ少クモ南側ハ晝夜共開放ノコトニシテ居リマシタガ、嚴寒ノ候ナドニハ必ズシモ之レガ行ハレナク、時ニハ一向ニ行ハレテ居ナイ實情モアリマシタ。何シロ境界ノ不完全ナ大キナ室ニ重症ト輕症トガ相接近シテ容レテアツテ、之レハ又種々ノ關係上變更モ出來ナイ所カラ病症程度ノ斟酌ナドデ我々ノ方デモ充分ノ勵行モ出來ナク、時ニハ又患者ガ開放ニ對シテ甚シキ憤慨攻撃ノ手紙ヲ新聞社其他ヘ送ルトイフ様ナ狀況デアリマシタ。デ、大正十三年ノ冬ニ至テ患者ニ懇々療養講話ヲナシテ、其中ヨリ選手トシテ男子二十九名(中二名ハ一二ヶ月ニテ退所)ヲ選出シ、試験的ニ徹底的ノ開放療法ヲ行テ見マシタ。ソノ病舎ハレ號舎(本所デハ病棟ヲいろは順ニ命名ス)デアリマシタカラ、以下ノ記載ニ於テモレ號舎ト稱スルコトニシテ置キマス。

### (二) 病舎及實行方法

レ號舎デハ病室ト臥堂トノ兩方ヘ別々ニ患者ヲ收容シマシタカラ、別々ニ其建物ノ大體ノ説明ヲシテ見マス。



(甲) 病室ハ震災後ニ急造シタ「バラック」病舎デアリマス。之ハ大阪市ヨリ東京市へ寄贈ノ組立「バラック」ヲ改造シタモノデアリマシテ土壁ノ無イ板壁ダケノ建物デ屋根モ瓦デナク、「トタン」葺キデアリマス。

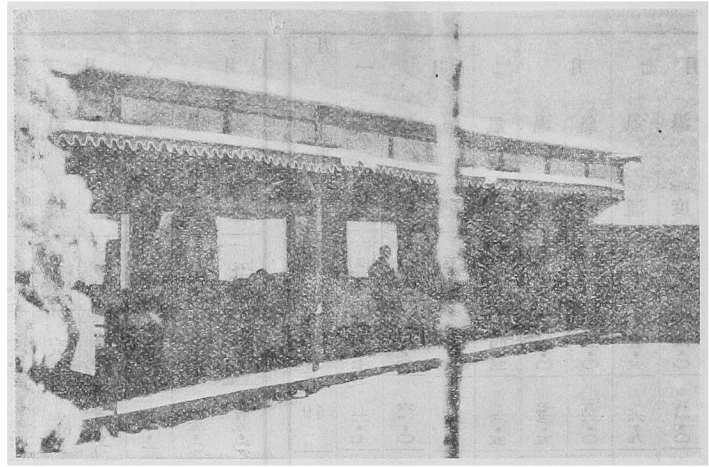
第十六表 病舎ノ病室トシテ使用セル部分ノ窓ノ坪數

病舎部分	南側		北側		天井		井		計
	面	積	面	積	面	積	面	積	
總面	一三・三三	坪	一七・二九	坪	四・六	坪	同シニ見ル	一〇・六三	坪
普通窓	三・五		三・五					七・〇	
又廻轉窓	一・五		一・五					三・〇	
ハ天井廻轉窓	〇・五		〇・五				一・五	二・五	
戸出入口			〇・五				二・〇	二・五	
口計	五・五		六・〇		一・五		二・〇	一五・〇	

南北四間、東西十五間、面積六十坪（内病室四十六坪、診察室六坪、他ハ附屬室）、梁下十尺ノ建物デ天井ハ平ニ張ラズ屋根裏ニ沿フテ張リ其棟ニ相當大キナ排氣孔三ヶ所アリテ、其處ニ廻轉窓十二個ヲ附ケタモノデアリマス。コノ建物ノ病室トシテ使用セル部分ノ窓ノ總面積ハ上表ノ如クデアリマス。

此病舎ニ於テ晝夜共南側ハ窓障子全部ヲ取外シ廻轉窓モ全開シ尙天井廻轉窓ハ南側六個ダケ開キ置クコトニ命ジマシタ處、患者ハ自カラ晝間北側ノ窓マデ開放シ（一枚重ナル様ニ）東西兩側ノ出入口モ何レモ一本宛開ケ置キ夜間モ北側迄廻轉窓ヲ開ケ置クコトガ普通デアリマシタカラ我々ハ患者ノ自由ニ任セテ其經過ヲ觀察シテ居リマシタ。即チ全ク吹放シノ室デ火鉢、「ストーブ」等ヲモ入レマセンデシタ。

(乙) 臥堂、之レハ東西ノ間口十間奥行一間半ニテ北側ノ外東西兩側ト屋根ダケ板圍ヒガアリマシテ、北側ニハ硝子窓五ヶ所（六尺ニ三尺ノ硝子窓ガ附ケテアリマス。之ハ開放スルコトモ閉ヂルコトモアリマスガ冬ハ閉ヂタマ、デアリマス。屋根ハ板及「トタン」ダケデ、南側ガ上ノ方ヘ向テ開イテ居リマス。患者ハ此所ニ晝夜共寢臥休息シ居リテ唯食事時間、診察時間其他稀ニ自分ノ雜用ノ爲メ別室ヘ入ルコトガアルニ過ギマセン、屋根ハ南側ガ上ヘ向イテ居リ其端ニ庇ノ様ニ前下方ヘ差出シ得ル日蔽ガ付ケテアリマスガ、之モ雨デモ降り込ム時デナケレバ決シテ下ロスコトナク雪位ナレバ「ゴム」布デ寢臺ヲ蔽フテ寢臥シテ居リマス。「ストーブ」モ火鉢モ勿論アリマセン。寫眞ハ昨年一月三十一日大雪ノ朝



第十七表

れ號病室ニ於ケル一日平均氣溫(攝氏)、比較濕度及氣壓表。大正十四年。觀測時間午前六時、十時、午後三時、七時

月	氣象	日
氣	溫	1
		2
		3
		4
		5
		6
		7
		8
		9
		10
		11
		12
		13
		14
		15
		16

患者ガマダ起キ出デナイ前即チ雪ノ蹈マレナイ前ニ降雪中ニ撮影シタモノデア  
リマス。外國デハ如何ニ徹底のニ開放療法ヲ行ヒマシテモ、ソレニハ別ニ又溫  
カイ室ガアツテ更衣飲食雜用等ハ其處デ行フヤウニナツテ居マスガ、此れ號舍  
デハソノ室モ「バラック」病室ノ一部デ僅ニ火鉢ガ一ツアリテソレモ間々炭火ヲ  
入レテアル位ニ過ギマセンカラ、室ノ不完全ナルコト其他ヲ綜合シマスト、外  
氣ノ溫度ニ暴露シタ程度デハ、外國デモマダ見タコトノナカツタヤウナ狀態ニ  
患者ヲ置イタコトニナリマス。此臥堂ハホストンノ結核協會ノ兒童結核豫防院  
Preventoriumノ施設ヲ眞似タノデアリマスガ、ソレニ比シテハ建物其他ノ粗惡  
デアルコトハ比較ニナリマセン。

前記甲即チ病室内ニ於ケル氣象觀測ノ一部(寒季及暑季)ヲ左表ニ掲ゲマス。  
前記ノ病室及臥堂ノ對照トシテれ號病室ト同一ノ建物ニテ開放ノ之ヨリ稍々少  
イよ號舍及本所中庭ニ於ケル氣象觀測比較ハ建築物ニ就テノ條下第四十二表ニ  
掲ゲテアリマス。該表ニ依テ第一ニ臥堂次ニれ號舍ガ最高最低氣溫共ニ最モ中  
庭即チ戶外ノ氣象ニ近イコトガ分リマス。之ト「建築物ニ就テ」ノ條下ニ掲グル  
樽ノ内外ニ於ケル氣溫濕度表トヲ參照比較スルト建物ガ外界ノ氣象ヲ緩和スル

月	八	月	七	月	二	月	一
氣	濕	氣	氣	濕	氣	濕	氣
壓	度	溫	壓	度	溫	度	壓
五・三	八七・七	二四・九	四・三	九・五	二・〇	六・三	八・七
五四・〇	八五・七	二五・二	四七・〇	六八・七	六・〇	二・五	八二・八
五五・〇	九五・〇	二四・一	四九・〇	七七・三	六四・五	二・二	八四・五
五・三	八七・〇	二五・〇	四九・〇	七・〇	六八・八	二・三	八八・五
五五・二	八・五	二五・五	四九・八	七九・三	七〇・〇	四・二	八五・〇
五五・二	八・五	二五・二	五〇・〇	八四・三	八八・五	四・〇	六五・三
五五・八	八一・三	二六・七	五・八	八六・八	八一・五	七・二	六七・五
五五・八	七・五	二六・三	四九・三	七〇・七	五四・五	七・七	七五・〇
五五・二	八四・二	二六・五	五・八	八三・八	五九・八	四・一	七九・〇
五二・九	七九・七	二七・四	五七・八	九三・五	六〇・〇	五・五	八四・八
五四・七	八〇・〇	二七・二	五三・三	八六・八	五九・七	三・二	七七・二
五五・五	九二・〇	二五・六	五・三	八八・八	六五・七	二・三	七三・五
五〇・二	八〇・七	二五・四	五・〇	八三・三	六三・三	三・五	五八・九
五〇・二	九・八	二三・七	五三・三	八三・八	五九・三	三・九	六〇・三
五二・九	八五・五	二四・三	五六・五	七八・三	四九・〇	五・二	五九・五
五〇・二	九二・七	二五・九	五七・三	九・四	六六・〇	五・二	六四・三
五〇・二	二八・二	二三・〇	五八・二	三三・〇	五八・二	五・二	七三・五

月	七	月	二	月	一	月	氣象
濕	氣	氣	濕	氣	氣	溫	日
度	溫	壓	度	溫	壓	度	
九・五	二三・六	五七・三	八八・七	三・七	五五・五	六・〇	17
九四・〇	二五・五	五五・〇	八六・〇	四・三	五八・八	六四・〇	18
八一・〇	二六・九	五六・〇	七三・五	三・五	五六・八	六二・〇	19
七三・三	二四・九	五三・三	五八・七	二・六	五八・三	五五・〇	20
七八・〇	一六・四	五六・〇	七四・七	二・三	五五・五	五九・〇	21
七九・〇	二四・八	五四・〇	九二・二	〇・九	五八・五	五六・五	22
八七・五	二五・八	五五・八	七四・〇	四・一	五三・三	六・一	23
八〇・三	二六・九	五五・五	五八・三	一・八	五五・五	六・〇	24
七七・三	二五・〇	五八・八	六四・三	二・五	五六・五	六〇・〇	25
八六・一	二三・六	五九・三	六六・五	一・六	五五・〇	五五・七	26
八〇・四	二九・七	五三・三	七七・八	二・七	五二・八	六三・五	27
七四・〇	二四・七	五八・〇	六五・〇	四・一	五・五	五〇・二	28
七七・八	二八・二				五五・六	六〇・七	29
七七・〇	二六・一				五九・八	八三・五	30
七五・〇	二八・二				五〇・〇	七四・五	31

月	八			氣 壓
	氣 濕 度	氣 溫	氣 壓	
氣 壓	五五・二	六六・一	五五・五	五五・五
五五・九	八七・二	六六・九	五五・八	五五・八
五五・〇	八四・七	二六・二	五五・五	五五・五
五五・〇	八六・〇	二五・八	五五・三	五五・三
五五・五	八三・二	二六・五	五五・〇	五五・〇
五五・一	七八・七	二六・六	五五・〇	五五・〇
五五・〇	八三・二	二五・八	五五・三	五五・三
五五・二	七九・〇	二五・六	五五・〇	五五・〇
五五・二	九七・二	二五・八	五五・八	五五・八
四八・九	九八・七	二五・〇	五五・〇	五五・〇
四七・〇	八四・〇	二八・一	五五・三	五五・三
五〇・一	七六・二	二八・九	五五・〇	五五・〇
五三・二	八三・〇	二七・八	五五・〇	五五・〇
五〇・二	八二・七	二八・二	五五・八	五五・八
五〇・八	八二・五	二七・九	五五・三	五五・三

註、氣壓ハ自記氣壓計ニヨルモノニシテ耗ヲ以テ表シ之ニ七〇〇ヲ加ヘテ讀ム。

程度ヲ察スルコトガ出來マス。

藥劑等。開放大氣療法影響觀察ノ爲メ選出セル患者ニ於テハ止ムヲ得ザル對症療法ノ外、一切藥劑ヲ與ヘズシテ專ラ大

第十八表 各病舎開放表(自大正十五年二月十八日正午) 十九日同 (二〇ハ全開〇ハ全閉)

室 前												窓	病 舎 名
口入出		側 北 側						側 南					
		窓 大		窓 轉廻		窓 大		窓 轉廻					
夜	晝	夜	晝	夜	晝	夜	晝	夜	晝	夜	晝		
60	100	50	50	100	100	100	100	100	100	レ			
50	34	0	50	100	100	30	50	100	100	ハイ			
35	20	0	0	100	100	33	80	100	100	ロ			
70	70	25	50	100	100	50	50	100	100	ニ			
0	35	0*	70*	60*	35*	0	50	90	100	ホ			
25	50	0*	6*	80*	80*	80	100	95	95	ヘ			
0	25	6*	0*	0*	25*	0	60	50	100	ト			
15	45	0*	15*	75*	80*	30	45	100	100	チ			
15	25	0*	6*	90*	97*	0	60	100	100	リ			
0	35	0*	0*	100*	100*	0	38	100	100	ヌ			
0	35	0*	65*	90*	90*	0	33	100	100	ル			
12	10	0*	0*	60*	50*	0	15	60	60	ワ			
40	100	0	0	45	45	50	70	60	55	カ			
60	100	0	10	0	0	0	25	0	70	ヨ			
40	100	0	15	30	30	0	20	85	100	タ			
40	100	0	35	70	25	0	50	90	100				
室 後												窓	病 舎 別
口入出		側 北 側						側 南					
		窓 大		窓 轉廻		窓 大		窓 轉廻					
夜	晝	夜	晝	夜	晝	夜	晝	夜	晝	夜	晝		
0	100	0	50	100	100	50	50	100	100	ハイ			
0	0	0	0	50	70	0	50	50	50	ロ			
0	100	0	25	100	100	0	100	100	100	ニ			
15	10	0*	25*	0*	0*	25	80	80	85	ホ			
0	0	0*	0*	85*	70*	60	100	100	100	ヘ			
0	0	0*	40*	75*	75*	0	0	0	40	ト			
0	0	0*	65*	15*	5*	15	100	100	100	チ			
0	0	6*	0*	77*	80*	0	70	70	85	リ			
0	0	0*	0*	85*	90*	0	80	85	85	ヌ			
0	20	0*	25*	100*	100*	0	100	100	100	ル			
0	10	0*	10*	50*	50*	15	50	50	50	ワ			
80	100	0	0	45	55	0	70	70	70	カ			
40	100	0	10	0	20	0	10	10	30	ヨ			
60	60	5	15	35	30	5	100	100	35	タ			
40	100	0	15	65	5	0	85	85	65				

\* 印ハ北側ニ廊下アリ其外障子ハ普通閉サル

第十表 本所中庭ニ於ケル測定

候天	(耗) 氣壓	溫氣 (氏攝)	較比 度濕	及間時定測 項事查調	正年大 五十五
朝來曇ニシテ東ノ微風吹キ	758	-2.0	80	時六前午	二月十八日
稍ナリ依然曇、日中稍ク暖	758.5	8.0	35	時十前午	
午後ニシテ西南微風	758	8.5	100	時三後午	
十一時頃ヨリ降雨アリ	761	6.0	100	時七後午	
		-3.2		低 最	二月十九日
		8.5		高 最	
朝ヨリ西北微風曇ニテ時々	764	2.3	100	時六前午	
晴午後ヨリハ風稍ク強ク寒	764.5	8.0	71	時十前午	
	762	9.5	66	時三後午	
	762.5	6.0	55	時七後午	
		2.0		低 最	
		12.0		高 最	

於テれ號舎ノミナラズ全病舎ノ患者ニ就テ調査シタ事項ハ此開放療法ノ下ニ於テ行タノデアリマス。

(三) 患者ノ經過及症狀等

患者ノ選擇。上記ノ如キ外界ノ氣象ニ暴露サセテ見ヤウトイフ計畫デアリマシタカラ、最初ニハ患者ノ選擇ニモ種々注意ヲ拂ヒマシテ、大正十三年十二月ニ全病舎七百數十名ノ患者ノ中カラ選手トシテ二十九名(中二名ハ間モナク退所)選ビ出シマシタ。患者ハ熱、脈其他ノ全身症狀ノ比較的落付キタルモノ、ミデアリマシテ、而カモ自ラ志望シテ之レヲヤツテ見ヤウトイフ者ダケデアリマシタ。併シ病期及打聽診所見等ハ特ニ輕イモノバカリ選ンダノデハ判斷ガ六ケシクナリマスカラ、ソレハ必ズシモ輕イモノトイフデハアリマセン。今此ノ患者ノ病期別、病型別及經過ヲ表示シマスト左ノ

氣安臥療法ヲ命ジ、各患者夫々ニ適當ナル程度ノ運動ヲ課シ日課ノ勵行ヲ期シマシタ。固ヨリソレニハ各患者ヲシテ能ク納得セシムル爲、相當ノ教育ヲ要シタノデアリマス。

上記れ號舎ノ患者ニ於テ徹底的開放療法ヲ行ヒテ經過ノ良好ナルモノガ多クアリマシタカラ、爾來各舎何レモ開放療法ノ勵行ハ期セズシテ一段ノ進歩ヲナシ、昨年ハ初冬ノ頃ニナツテモ各病舎何レモ患者ガ自ラ進ンデ之ヲ實行シマシタ。今試ニ今年二月十八日正午ヨリ十九日正午ニ至ル一日間ノ各病舎ノ開放程度及氣溫濕度ヲ表ニ示シマスト上ノ如クデアリマス。非常ニ窓ノ多イ病舎ノミデアリマスカラ何レモ非常ナ程度ノ開放ニナリマス。(此表ノ夜ノ分ハ早朝患者ノ未ダ起牀セザル前ニ開放ノ實狀ヲ記載シタモノデ、晝ノ分ハ正午ニ於ケル開放ノ實狀デアリマス) 以下ノ記載ニ

通りデアリマス。但病型別ハ主トシテ何レカトイフ意味デ分ケタモノデアリマス。

第十二表 病期別

病期	患者數	經	過
第一期	四	治癒又ハ輕快三、不變一	
第二期	二	治癒又ハ輕快一六、不變三、增惡一、死一	
第三期	二	死二	

病型別

病型	患者數	經	過
増殖型乃至纖維型	二三	治癒又ハ輕快一八、不變四、增惡一	
滲出型	四	輕快一、死三	

大正十四年六月以降ノ入所者中レ號舍ニテ昨冬新ニ寒季開放療法ヲ開始シタル患者ハ二十六名デ、其觀察シタル結果ハ第二十一表ノ通りデアリマス。但シ此外ニ昨年ヨリ繼續シテ行ヘル者ガ三名アリ、マスガ、ソレハ該表カラ除キマシタ、コノ三人中一人ハ經過不良二人ハ良好デアリマス。

第十二表

病期	患者數	經	過
第一期	九	良七、不良一、死一	
第二期	一一	良一〇、不良一	
第三期	六	良二、不良二、死一	
増殖型乃至纖維型	一六	良一三、不良二、死一	
滲出型	一〇	良六、不良三、死一	

第二十二表

病期	患者數	經	過
第一期	一一	治癒又ハ輕快一一、不變一	
第二期	二一	輕快一八、不定三	
第三期	七〇	輕快三五、不變三、不良一五、死一四	
増殖型乃至纖維型	九五	治癒輕快六四、不變四、不定五、不良一二、死亡一〇	
滲出型	八	不良四、死亡四	

上記ノ患者ハ昨年十一月頃迄ニ大部分退所シマシタ。其經過ハ上表ニ依テ觀ルヲ得ル如ク大體甚ダ良好デアリマシタ。之ハ東京市療養所ノ一般ノ患者ノ經過ニ比較スルト非常ナ良成績デアリマシテ、其主因ハ固ヨリ症状ノ安定ニ傾イタ患者ヲ選ンダトイフコトニ在ル譯デアリマスガ、ソレニシテモ上述ノ大氣療法ガ有害デナカツタ事ハ確カデ、後ニ述ブルガ如キ諸種ノ良徵ハ偶然ノ事デハナカツタノダト考ヘラレマス。以上ノ外石川友示君及矢部升君ノ病舍デ觀察シタ百三

名ノ患者ノ經過ハ第二十二表ニ示ス通りデ大體ニハ前者同様良成績ヲ示シテ居リマス。

患者ノ大體ノ經過

以上ノ諸表ニ依テ見ラル、ガ如ク、各期ノ患者ニ於テ大體ニハ何レモ經過ノ良好ナル者が多クアリマシタ。唯進行性ノ患者デハ經過依然トシテ不良ニテ終ニ不歸ノ客トナレル者モアリマスガ、之レハ如何ナル療法ヲ以テスルモ免レザル所デアリマス。經過不良ノ患者ヲ死亡ニ至ル迄レ號舎ノ開放室ニ置イタトイフト甚ダ亂暴ノ様デアリマスガ、ソレハ患者ガ轉室ヲ肯ジナイ故ニ起タ事實デアリマス。最後迄轉室ヲ肯ジナイニ就テハ種々ノ理由ガアルヤウデスガ、何レニシテモ其患者ガ開放室ヲ甚シク厭フニ至ラナカツタカ、又ハソレヲ却テ喜ンデ居タ爲メデアルモノト考ヘザルヲ得マセン、但我々ノ所デハ大室ニ多勢ガ一緒ニ居マスノデ、開放ガ足りナイト可成リ不快デアリマスカラ、他所デ一人ノ患者ガ廣イ一室ヲ利用シテ居ラレル場合トハ餘程違フ點モアルト見テバナリマセヌ。

各個ノ症狀ニ就テ

體溫。一般ニ寒季開放療法ニ入りテ後ニハ、體溫ノ下降スル者が多イ。殊ニ著明ナルハ自宅カラ入所シテ來タ者デアツテ、突然ニレ號舎ヘ入レタノハ甚ダシキ亂暴ノ如クニモ考ヘラレマセウガ、事實何等ノ障碍モ呈シナクテ、却テ體溫下降等ノ良徴ヲ示スモノガ多クアリマス。併シ外部ヨリ本所ヘ入所シテ來レバ、體溫ノ下降スルコトノ多キハ、本所多數ノ患者ニ共通ノ事項デアリマスカラ、特ニ大氣療法ノミニ依テ然ルモノト言フコトハ出來マセンガ、一昨年十二月レ號舎ニ收容シタモノハ、既ニ在所治療中ノ患者ヲ各病舎ヨリ集メタ者デアリマシタカラ、外部ヨリ新ニ入所シテ來タモノトハ同ジデアリマセン。然ルニ同ジク體溫下降等ノ良徴ヲ呈シタモノガ多クアリマシタ。

但シ是等ノ例ニ在テモレ號舎デハ日課等ヲ一層嚴重ニ勵行セシメタノデアリマスカラ、安靜等ノ效果モ加ハツテ居ルデナキカラ願ミテバナリマセン。又寒冷ノ季節ソノモノ、作用ヲモ願ミテバナリマセン。之ニハ爾他ノ病舎ニ於ケル成績ト充分ナル比較ヲナス事ガ肝要デアリマス。故ニ其等ト區別シテ、眞ニ開放療法ノ徹底ノミノ效果ヲ識別スルハ容易ノ仕事デアリマセン。

然レドモ何レニシテモ、其成績ハ良好デアリマスカラ、如上各種ノ長所ヲ具備セル開放療法ガ有效デアルトイフ事實ハ認メラレマス。

循環系。循環系ノ受ケタル影響デハ脈搏數ノ關係ニ就キ後ニ第五十八表ノ説明中ニモ之ヲ述ベルコトニシマスガ、尙鈴木左内君ガレ號舎ノ患者ニ就テ血壓其他ヲ測定シタ成績ニ於テモ興味アル事實が見ラレマス。各測定ノ都度毎常一定ノ成績ヲ現ハシテ居ルトハ云ヘマセンガ、其全部ノ取纏メハ鈴木君ノ發表ヲ待ツコトトシテ、茲ニハ左ノ二表ヲ紹介シテ置キマス。表中午後十一時ヨリ午前五時迄ノ間ノ測定ハ患者ノ睡眠中又ハ半睡中ニ行タノデアリマスカラ、同時ニ氣象ト睡眠トノ兩事項ノ影響ヲ受ケテ居ル譯デアリマスガ、氣溫降下ノ時間ニ於テ、脈搏數ハ減少シ、最大血壓ハヤ、降下セラルガ多イノニ、最小血壓ハヤ、上昇ヲ示シテ居リマス。之ハ斯ル例ガアツタトシテ茲ニ述ベルニ過ギナイガ、心臟ノ安靜トナレル間ニ血管ノ緊張ハ高マツテ居ル状態ガ認メラレテ面白イト考ヘマス。

第二十三表 寒季開放療法中ノ血壓測定成績

二月二日 ( )、二月二十一日 ( )レ號舎臥堂ニ於テ測定セルモノ

時 刻	空 温	最 高 血 壓		最 低 血 壓		脈 數	體 温 (攝 氏)	位 置
		觸 診 法	聽 診 法	觸 診 法	聽 診 法			
10.30 A.M.	6.0°	115	126	68	58	86	36.7°	仰 臥 位
3.00 P.M.	9.0	124	130	68	62	74	36.8	"
7.00 "	2.0	122	128	66	62	72	36.9	"
11.00 "	-1.0	116	118	78	40	68	"	"
4.30 A.M.	-6.5	109	118	72	46	64	36.7	"
10.30 "	8.0	107	118	72	46	76	"	"
3.00 P.M.	12.0	120	126	66	60	76	36.8	"
最小—最大 其 差	-6.5—12.0	107—124	118—130	66—78	40—62	64—76	36.7—36.9	
	18.5	17	12	12	22	12	0.2	



■ 共 24歳 第三期	最小—最大 其差		95—102	50—64	35—48	66—88	36.1—36.5	呼吸数	
	最小	最大							
10.00 A.M.	3.2%	36	100	58	42	90	31.1°		
3.00 P.M.	6.5	25	97	58	39	74	36.5		
7.00	5.5	25	95	50	15	66	36.5		
12.00	1.5	25	97	60	27	70	36.5		
5.00 A.M.	-0.5	96	102	64	38	67	36.3		
10.00	0.0	90	102	54	45	88	36.3		
		-0.5—6.5	83—96	95—102	50—64	35—48	66—88	36.1—36.5	
		7.0	13	7	14	11	32	0.4	

喀痰ノ分量、各個人ノ分量ニ於テハ、日々多少ノ増減ガアリマスガ、れ號舍全患者ノ喀痰量ヲ合計シテ、其ノ總和ヲ見マシタ處、寒季開放療法實行中ニ漸次明カナル減少ヲ示シマシタ(左表參照)。

第二十四表 寒季開放療法患者喀痰總量、第一組十六名、第二組八名ノ喀出セ

ル總量ナリ

月	三	二	月	一	月十二		曆日
					第一組	第二組	
九〇	二五	一一三	一五九	一六七	一四四	一一三	1
五六	四〇	八〇	一六一	一七二	一四四	一一三	2
七二	二八	一〇二	一四一	一四四	一一三	一一三	3
三八	四四	三七	一四一	一一三	一一三	一一三	4
七七	三四	一〇一	一四五	一二三	一一三	一一三	5
六六	六四	一〇二	一一九	一一〇	一一〇	一一〇	6
九〇	六二	一〇一	七八	一二二	一一二	一一二	7
三四	三一	四〇	三六	九四	九四	九四	8
七四	二四	五二	三二	九一	九一	九一	9
五〇	四七	六四	四〇	一〇二	一〇二	一〇二	10
六一	二六	六八	七〇	七二	七二	七二	11
九〇	五九	八九	四六	九〇	九〇	九〇	12
四四	三七	六二	三八	七一	七一	七一	13
五九	二五	四七	三五	八七	八七	八七	14
二九	三六	二四	五〇	一一七	一一七	一一七	15
八四	四七	一〇三	八三	五三	五三	五三	16

月	二	一	十二	曆日
月 第二組	第一組	第一組	第二組	17
六七	五四	五四	二四五	18
五六	九七	九七	二七〇	19
八一	五〇	五〇	二八三	20
七九	七一	七一	二九七	21
	五二	五二	三〇九	22
	九四	九四	三二七	23
	九三	九三	三三七	24
	六二	六二	三四六	25
	五四	五四	三六一	26
	一〇二	一〇二	三二六	27
	七三	七三	三〇九	28
	一一七	一一七	二九四	29
	五二	五二	二七九	30
	六七	六七	二六四	31
	二五	二五	二四九	
	五〇	五〇	二三三	
	八二	八二	二一七	
	三六	三六	二〇一	
	八三	八三	一八五	
	六四	六四	一七〇	
	四五	四五	一五四	
	三六	三六	一三八	
	一七	一七	一二二	
	〇八	〇八	〇六	
	〇一	〇一	〇〇	

備考、第一組ハ第一回ニ寒季大氣療法ヲ開始シタル患者ニシテ、當時二十一名ナリシモ、一名ハ中途ニテ退所シ、一名ハ他ノ合併症ノタメニ轉舍セシメラレ、三名ハ咯血ノ爲、咯痰分量不明トナリ、且止血劑又ハ鎮咳劑ヲ服用シタルヲ以テ總テ除外ス。

第二組ハ第一組ヨリ開始ノ遅ル、コト一ヶ月餘ナリシヲ以テ別組トス。

表中月日ノ欄ニ×ヲ附セルハ風強クシテ砂塵濛々タリシ日ニシテ、井ハ其最モ甚ダシク窓ヲ開放スルコト能ハザリシ日ナリ。

盜汗ノ發シタモノハ僅カデアリマシタガ、之モ別ニ他ノ方法ヲ用ヒズシテ消散シマシタ。

體重ノ變化ハ、冬期ノ増加ト、夏季ノ減少ニ於テ相當著シキ變化ヲ示シマシタ。

胸部ノ所見。打聽診所見及X光線診查所見ハ患者ニヨリテ夫々違テ居リマスガ、大體ニハ良經過ヲ認メシメタルモノガ

多イ。是等ノ詳説及血液像ノ良徵ヲ呈セル等ハ、寺尾ノ別報ニ讓テ置キマス。

以上ノ外患者ノ自覺ニ於テ開放療法ガ良イカ、悪イカトイフコトヲ調査シマシタガ、開放療法ニ於テハ嚴寒ノ候モ、氣

分、食慾、睡眠等ノ佳良ナルモノ多キハ事實デアリマス(左表參照)。又患者ガ甚ダ開放ヲ好ミ、密閉ヲ厭フニ至ルハ極

メテ速カデアリマス。

雪ノ時ナドハ我々ガ察シテモ却テ苦痛ガナイカモ知レヌト思ハレマスガ、後ニ天候ノ開放療法ニ及ボス影響ノ所デ述ベマスルヤウニ、風ハ最モ厭ハレマスノデ、今年二月ノ非常ニ寒風ノ強イ晚ニ私ハ大變心配ニナツタカラ、午後七時半頃



此表ハ今年ノ一月十八日正午ヨリ十九日ノ正午ニ至ル一日間ノ現状ヲ調査シタモノデアリマシテ、此日ノ各病舎ノ窓ノ開放ハ第十八表ニ掲ゲテアリマス。此開放状態ニ於テ、患者ノ氣分、食慾、睡眠、感冒性症狀等ニ關スル調査事項ヲ各欄ヘ記入セシメタノデアリマス。ドノ事項モ佳良トスルモノ又ハ普通トイフ者が最大多數ヲ占メ、不良ト言テ開放ヲ厭フ意味ヲ示シタモノハ極メテ少數デアリマス。尙仔細ニ觀察シマスト、氣分ニ於テハ佳良トイフ者が著シク多ク、不良

調査事項	病期	體度			期			過			經			別
		度三十八	度三十七	度三十六	第三期	第二期	第一期	不良	不變	良	別	體	期	
障礙	シ	ナ												二二
記	者	載												二八九
不感	シ	悪	リ	ア	障	等	良							一五
風	リ	ケ	引	ラ										六
惡感	リ	ア												九
惡頭痛	熱	發	リ	ア	感	惡	シ							一
發熱	リ	ア												四
頭痛	リ	ア												二
風邪發熱	水	鼻	味	氣	邪	風	出							二
鼻水	ヅ	出												四
咽喉部痛	ム	痛	部											三
咳嗽	ヅ	出												四
起床時少シ障	障	シ	少	時	狀	起	碍							二
早晨風引キ	キ	引	ラ	風	朝	早								一
北風時障	碍	障	時	ノ	風	北								二
計														五五

ト普通ハ極メテ少數デアリマスガ(良三六一、不良四〇)、食慾ニ於テハ佳良ト普通トハ略々同數デ不良トイフガ甚ダ少ク(良一四一、不良四四)睡眠ニ在テハ其中間ニ位シ、佳良トスルモノ多數ナルモ、普通トイフモノモ其ノ半數ニ達シマス(良一九五、不良八六)之ヲ概括スルト開放療法ニ依テハ第一ニ氣分ガ甚ダ好クナリ、次ニハ睡眠モ良好トナル、食慾ニモ不良トイフ者ハ甚ダ少ナイトイフコトニナルデアリマス。(第十七表及ビ第二十表氣象表參照)。

此調査ハ早朝眼醒メタ時カラ夜中迄ノ間ヲ第二十八表ノ如ク十區分ニシテ、各時ノ感ジヲ別々ニ記入セシメタノデアリマスガ、其ノ中一定時例ヘバ早朝トカ、午後トカ、夜中トカダケニ何等カノ故障ヲ記載シタモノハ、良但シ一定時不良トカ、不良但一定時良トカイフ欄ニ纏メテアリマス。前者ハ大體佳良デアルガ、一定時ダケ不良トイフ意味後者ハ其反對デアリマス。此答案用紙ハ當日ノ全患者七百四十餘名ノ中四六五名ガ答ヘタモノデアリマシテ、重症ナモノニハ看護婦ヲシテ聽取シテ書カシメタモノデアリマス、各患者ヲ更ニ經過ノ良、不良、病期(大體ツルバン、ゲルハルト氏ニ從フ)及熱候ノ有無、高下等ニ分チテ觀察シマシテモ、ヤハリ氣分、食慾、睡眠共ニ佳良又ハ普通ト云フモノガ大部分デアリマシテ、不良トイフハドレニモ甚少數デアリマス。併シ細別ニ互テ觀察シマスト經過不良ノ患者ニ在テハ、經過良好ノ患者ニ比シテドノ項ニモ不良ガ割合ニ多ク、就中食慾ガ大ナル相違ヲ示シ、次ニ氣分、睡眠ノ順ニテ同様ノ結果ヲ示シテ居マス、經過不變ノ者ニ於テハ是等自覺ノ良否モ中間ニ位シテ居マス。

病期ノ進行ニ從テ不良ヲ訴フルモノ、増加スルコト及熱候ノ存在乃至高度ヲ示ス者ニ不良ヲ訴フル者ノ多キコトモ、共ニ大體經過ノ不良ナル患者ニ不良ヲ訴フル者ノ多キコトト相平行シ、就中食慾ニ於テ之ガ認メラレマス。併シ之レハ必

表六十二第

第一類	第二類	第三類
經過良	經過不變	經過不良
又ハ第一期	又ハ第二期	又ハ第三期
又ハ體溫三六度九分以下	又ハ三七度至三八度	又ハ三九度以上
I	第一類ト第三類ノ中間	七五以上乃至
I	第一類ト第三類ノ中間	四乃至五
I	第一類ト第三類ノ中間	二以上乃至

ズシモ開放大氣療法ヲ特ニ厭フトイフ意味デハナク、病勢ノ爲メ不良ニ感ズルコトモ多ク混同サレ居ルモノト思ハレマス。何トナレバ一方ニハ死ニ至ル迄極度ノ開放室

ノ中ニ喜ンデ居テ轉室ヲ肯ジナカッタ者モアルカラデアリマス。此割引ヲ加ヘテ觀ルコトニ願テ第二十六表ヲ掲ゲテオキマス。之ハ經過ノ不良又ハ病期ノ進ミタルコト、熱ノ高キコト等ノ爲開放療法中ニ食欲ト氣分ト睡眠ノ三者デ不良ヲ感ズル人數ノ増加スル割合ノ違フコトヲ表示シタモノデアリマス。

第二十五表ノ成績ハ患者ガ開放ニ慣レタルガ故ニ斯ク變ジタルコトヲ示スモノデナキヤニ就テハ、多少ハ斯ル關係モアラウガ大體ニハ然ラズシテ、多クハ初メヨリ同様ニ感ズルノデアリマス。之ハ外部ヨリ入所シテ來タ患者ヲ直ニレ號舍ヘ入所セシメテモ別段ノ苦痛ヲ訴ヘザルニ依テモ知ルコトガ出來マス。尙之ニ關シテ左ノ調査ヲシマシタ。即チ前掲第二十五表ト同一ノ事項ニ就キ二月下旬ニ於テ寒季ノ初メト自覺ノ良否ガ同様ナルヤ又ハ最初ハ苦痛多カリシモ慣ル、ニ

第二十七表 冬季開放療法ニ於ケル諸症狀調査表 (乙)

期	病			過			全記載者	事項	調査		調	氣
	三期	二期	一期	不	變	良			良	日		
67	39	30	11	50	75	136	メ初季寒	良	日	終	氣	
79	41	38	14	57	87	158	中途季寒	良	日	終		
17	34	14	11	22	32	65	メ初	時定一)	良	不	分	
11	23	5	3	10	21	39	中途	(良不	時	時		
1	1	0	1	1	0	2	メ初	時定一)	通	普	食	
0	0	0	0	0	0	0	中途	(良不	時	時		
1	0	0	0	1	0	1	メ初	時定一)	通	普	慾	
1	0	0	0	1	0	1	中途	(良ニ	特	時		
14	6	3	1	10	12	23	メ初	良	不	良	睡	
5	9	0	2	6	6	14	中途	良	不	良		
3	1	1	1	2	2	5	メ初	時定一)	良	不	眼	
1	2	1	0	2	2	4	中途	(良時	良	不		
67	56	34	14	56	87	157	メ初	良	不	良	感	
70	55	38	15	59	89	163	中途	良	不	良		
19	11	5	5	17	13	35	メ初	時定一)	良	不	冒	
15	4	4	3	13	7	23	中途	(良不	時	時		
2	2	1	0	5	0	5	メ初	通	普	普	性	
5	3	1	0	7	2	9	中途	通	普	普		
3	1	1	1	2	2	5	メ初	時定一)	通	普	症	
2	3	1	1	4	1	6	中途	(良不	時	時		
0	0	0	0	0	0	0	メ初	時定一)	通	普	狀	
1	0	0	0	1	0	1	中途	(良ニ	特	時		
11	7	4	1	10	11	22	メ初	良	不	良	有	
9	9	3	2	9	10	21	中途	良	不	良		
1	0	2	0	2	1	3	メ初	時定一)	良	不	無	
0	1	2	0	2	1	3	中途	(良時	良	不		
67	56	32	12	62	81	155	メ初季寒	良	不	良	稀	
68	54	34	11	60	85	156	中途季寒	良	不	良		
5	3	1	0	8	1	9	メ初	通	普	普	有	
5	3	1	0	8	1	9	中途	通	普	普		
14	10	4	0	10	18	28	メ初	良	不	良	無	
13	12	2	1	15	11	27	中途	良	不	良		
21	7	5	3	15	15	33	メ初	有	無	無	稀	
9	6	4	2	10	7	19	中途	有	無	無		
35	42	18	9	38	49	96	メ初	有	無	無	有	
55	44	20	13	45	61	119	中途	有	無	無		
8	7	2	2	6	9	17	メ初	有	無	無	稀	
4	2	2	1	4	3	8	中途	有	無	無		

原著 田澤 肺結核ノ一般療法

温		體		
40°	39°	38°	37°	36°
臺	臺	臺	臺	臺
0	1	10	57	68
0	1	12	69	76
0	3	4	30	28
0	1	3	17	18
0	0	0	1	1
0	0	0	0	0
0	0	0	1	0
0	0	0	0	1
0	0	4	11	8
0	0	2	9	3
0	0	2	2	1
0	0	1	2	1
0	1	14	65	77
0	1	19	65	78
0	0	6	15	14
0	0	0	15	8
0	0	1	1	3
0	0	1	3	5
0	0	0	3	2
0	1	0	2	3
0	0	0	0	0
0	0	1	0	0
0	1	2	13	6
0	1	3	10	7
0	0	0	3	0
0	0	0	2	1
0	2	11	66	76
0	2	9	65	80
0	0	1	2	6
0	0	1	4	4
0	0	3	11	14
0	0	5	12	10
0	0	3	19	11
0	0	2	11	6
0	0	3	38	55
0	0	5	55	59
0	0	2	6	9
0	0	1	1	6

從テ、堪ヘ好クナレルヤヲ調査シタモノガアリマスガ、其成績ハ第二十七表ニ示ス通りデアリマシテ、之ヲ通覽スルト、漸次ニ慣レテ寒季開放療法ヲ厭ハナクナルトイフヨリハ、最初カラソレヲ好ム者ガ大多數デアルトイフ關係ガ、歴然ト分リマス。人ノ記憶ニ由ル比較故精細ナコトハ當テニナリマセンガ、大勢ヲ察スルコトダケハ出來ルト思ヒマス。故ニ寒季開放療法ハ慣レナイ者ニ突然初メテモ多クハ心配スルニ及バズ、唯其實行方法ニ就テ種々ノ注意ヲ要スルニ過ギナイト考ヘマス。

第二十八表ハ前記二十五表ニ掲ゲタ答申材料ニ據リ二月十八日正午ヨリ翌十九日正午ニ至ル一晝夜ノ調査成績ヲ一日十區分ノ各日時ニ就テ觀察シタモノデ即チドノカノ時間ニハ特ニ開放ヲ厭フトイフ時間ガナイカラ知ル目的デ調べタノデアリマスガ、ドノ時間ニモ大差ハアリマセン。少シノ數字ノ相違ヲイフト午後、夜中、早朝及晩ヲ不良トスル者ガ稍々多イヤウデアリマスガ、コノ位ノ數字ノ相違ハ特ニ取り立テテイフノハ却テ間違ヒノ種トナランカト思ハル、程ノ差デアリマシテ、大體ニ於テドノ時間デモ良トスル者ガ大多數デアリマス。此問題ハ後ニ亦タ湿度ノ條下ニ於イテ述べルコトニ致シマス。食慾ニ於テモ朝、午、夕何レノ食事ニモ殊ニ不良トイフハアリマセン。此調査ニ於テ冬ノ初ト二月下旬トノ比較ノ表ヲ作り見マスト二月ニハ日中ノドノ時刻ニモ氣分モ食慾モ之ヲ不良トスル人數ガ多少減少シテ居リマスガ(二三ガ二〇トナリ四〇ガ二四トナル程度ニテ)併シ特ニドノ時間ニ多クノ差違ガアルトイフコトハアリマセン。

第二十八表 開放療法ニ於ケル一日中各時ノ氣分ノ良否

夜中	就寢時	晚	夕食時	午後	午食時	午前	朝食時	起寢時	時	早朝覺メタ
二五三	二五五	二五九	二六〇	二五九	二六三	二六五	二六一	二六三	二七〇	二七一
六六	四四	五一	四五	七八	四九	四八	四二	四三	六一	六一
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
省	省	省	省	省	省	省	省	省	省	省

第二十九表 開放療法ニ於ケル一日各食時食慾ノ良否

夕食	午食	朝食	食事ノ食慾	記載人員	良	不	變	不	良
四二七	三五七	四二七	四二七	一七三	一八三	七一	五五		
一七〇	一五一	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三
二〇二	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
五五	八六	七一	七一	七一	七一	七一	七一	七一	七一

第三十表 大正十五年二月十八日正午ヨリ十九日正午マデノ室内氣象觀測表

日	二	月	十	八	日	二	月	十	九	日			
觀測時間	正午	午後二時	午後四時	午後六時	午後八時	午後十時	午後十二時	午前二時	午前四時	午前六時	午前八時	午前十時	正午
氣溫	七・〇	八・二	八・五	八・二	七・〇	六・六	六・〇	五・五	四・八	四・一	四・〇	七・〇	一〇・三
濕度	九四・〇	九一・五	八九・五	九一・五	九五・五	九七・〇	九八・〇	九九・五	九九・六	九九・六	一〇〇・〇	九九・五	九八・〇
氣壓	六一・〇	六一・〇	六〇・六	六一・〇	六一・〇	六〇・四	五九・四	五七・八	五六・〇	五五・〇	五四・〇	五三・三	五一・〇

原著 田澤 肺結核ノ一般療法



註、氣温ハ攝氏ニシテ巴里「ブレヴェテ」製自記寒暖計ニヨル。

濕度ハ伯林「ゲェルツ」製自記濕度計ニヨル。

氣壓ハ中村測量器械舖製自記氣壓計ニヨル。

#### (四)感冒罹患

冬季ノ開放療法ニ於テ、最モ問題トナルハソノ爲メニ患者ガ感冒ニ罹リハセヌカノ問題デアリマスガ、之レハ患者自身又ハ看護ノ者ノ不注意ヲ除ケバ割合ニ少キモノデアリマス。

第三十一表ハ今年ノ一月一日カラ二月二十八日迄ノ感冒罹患者ノ數ヲ表ハシタモノデ、毎日ノ全感冒者ノ數ト新患者ノ數トガ別々ニ擧ゲテアリマス。此調査ハ一定ノ患者ニ就キ毎日午前十時ノ檢温時ニ感冒性症狀ノ有無ヲ尋テ、何カ症狀ノアルモノハ皆記載シ、訴ノナキモノハ其印ヲナシオキテ、全病舎ノ分ヲ合計シタモノデアリマス。

其患者ハ各病舎デ大抵同ジ條件ノ下ニアル者ヲ選ビマシタガ、要スルニ比較的輕症デ外へ出歩キヲスル者ノミデアリマシタ。此表ニ於ケル新患者トイフモ、二日間以上訴ヘノ記載ナクシテ、更ニ又訴ヘノアル者ハ皆新患者トシテ數ヘタデアリマス。同表同欄内ノ(一)内ノ數字ハ一日デモ訴ヘノ記載ナクシテ、更ニ其翌日訴ヘノアルモノハ新患者トシテ數ヘタモノデ、前者ヨリ少シ多クナツテ居リマスガ大差ハアリマセン。此表ニ依レバ感冒者ノ數ハ寒中ノ開放療法ニ於テモ割合ニ少イモノダト云ヘマセウ。比較參照ノタタ、六、七月ノ候ニ於ケル感冒者數ヲモ掲ゲテオキマシタ。

第三十二表ハ前記感冒罹患者ガ毎日引續キ何等カノ訴ヲナスモノハ、ソレヲ一回ノ罹患トシ、一日間ダケ訴ヘノ記載ナキモノハ前者同様繼續ト見做シ、二日以上中絶シテ、更ニ亦訴ノアル者ハ別ノ罹患トシテ扱ヒ、以テ各罹患ノ持續日數ヲ調査シタモノデアリマス。二日位訴ヘガナクテ其後復タ訴ヘガアルトシテモ、ソレヲ別ノ罹患ト見ルハ無理デアルカモ知レマセンガ、幾日間中絶シテ居タモノヲ別ノ罹患トスルトイフ標準モナイコトデアリマスカラ、少ク共増悪シタモノト見做シテ別ニ數ヘル方ガ一律ニ扱フニ適當ト考ヘテソウシタノデアリマス。

第三十三表ハ中絶ノ如何ニ拘ハラズ寒季一月、二月ノ間ニ同一人ガ感冒ニ罹タ日數ヲ合計シタモノデアリマスガ、以上

二表何レノ見方ニ於テモ、大部分ハ一日ダケノ訴ヘデ、次ハ三日又ハ二日デアアル故、夫等ヲ簡單ナ一時的症狀ト見マス  
 ルト相當重イ感冒ニ罹ルトイフコトハ割合ニ少イモノト見ラレマス。

第三十一表 感冒表(甲)

日/月	總患者數		感冒者數		感冒率%		總患者數		新感冒者數		新感冒率%	
	一月	二月	一月	二月	一月	二月	一月	二月	一月	二月	一月	二月
一日	四〇三	三九七	五一	二四	一二・六	六・〇	三七三	三八〇	二一(二一)	七七	五・二	一・八
二日	四〇三	三九七	五〇	二〇	一二・三	五・〇	三六六	三八四	一三(一六)	七七	三・六	一・八
三日	四〇三	三九七	五〇	二五	一二・三	六・二	三六七	三八〇	一四(一五)	八(八)	二・一	二・〇
四日	二〇二	三九七	五五	二七	一三・五	六・八	三六二	三七六	一五(一八)	六(一〇)	四・一	一・五
五日	四〇一	三九七	五五	二八	一三・七	七・〇	三六三	三七四	一七(一七)	五(一〇)	四・六	一・三
六日	四〇一	三九六	五一	二九	一二・七	七・三	三六一	三七四	一一(一四)	七(一〇)	三・〇	一・八
七日	四〇二	三九五	四九	二七	一二・一	六・八	三七〇	三七四	一七(二〇)	六(七)	四・五	一・六
八日	四〇二	三九五	四五	二五	一一・一	六・三	三六九	三七八	一二(一五)	八(一一)	三・二	二・一
九日	四〇二	三九八	五四	二六	一三・四	六・五	三六四	三七四	一六(一七)	二(六)	四・四	〇・五
十日	四〇三	三九七	五四	一七	一三・三	四・二	三六八	三八八	一九(二〇)	八(八)	五・一	二・〇
十一日	四〇四	三九七	五三	一三	一三・一	三・二	三七一	三八八	二〇(二四)	四(五)	五・三	一・〇
十二日	四〇四	三九七	五二	一七	一二・八	四・二	三六五	三八七	一三(二〇)	七(一〇)	三・五	一・八
十三日	四〇三	三九七	五一	一八	一二・六	四・五	三六五	三八八	一三(一五)	九(一〇)	三・五	二・三
十四日	四〇三	三九六	三七	二五	九・二	六・三	三七八	三七八	一二(一四)	七(一三)	三・一	一・八
十五日	四〇三	三九六	三九	二〇	九・六	五・〇	三七一	三七九	七(一〇)	三(三)	一・八	〇・七

十六日	四〇三	三九七	四二	二〇	一〇・四	五・〇	三六八	三八一	七(一〇)	四(五)	一九	一・〇
十七日	四〇四	三九七	四〇	一九	九・九	四・七	三七七	三八五	七(一〇)	七(九)	一・八	一・八
十八日	四〇四	三九六	四一	一六	一〇・一	四・〇	三七三	三八六	一〇(一五)	六(九)	二・六	一・五
十九日	四〇四	三九七	三二	一七	七・九	四・二	三八七	三八六	一五(一六)	六(七)	三・八	一・五
二十日	四〇四	三九八	四一	二四	一〇・一	六・〇	三七七	三八五	一四(一八)	一一(一二)	三・七	二・八
二十一日	四〇三	三九八	三八	一六	九・一	四・〇	三七三	三九〇	八(一〇)	八(八)	二・一	二・〇
二十二日	四〇四	三九八	三〇	一四	七・四	三・五	三七九	三八四	五(五)	〇(四)	一・三	〇
二十三日	四〇四	三九八	二九	一三	七・一	三・二	三八一	三八七	六(九)	二(六)	一・五	一・五
二十四日	四〇三	三九八	三三	一九	八・一	四・七	三七七	三八七	七(一一)	八(八)	一・八	二・〇
二十五日	四〇三	三九七	三五	二三	八・六	五・七	三七六	三八三	八(九)	九(一〇)	二・一	二・〇
二十六日	三九七	三九六	二七	二三	六・八	五・八	三七四	三八一	四(八)	八(九)	一・〇	二・〇
二十七日	三九七	三九六	三三	二一	八・三	五・三	三七七	三八〇	一三(一四)	五(七)	三・四	一・三
二十八日	三九七	三九七	二六	二〇	六・五	五・三	三七八	三八四	七(一一)	七(一〇)	一・八	一・八
二十九日	三九七		二六		六・五		三八一		一〇(一五)		二・六	
三十日	三九七		二〇		五・〇		三八二		五(八)		一・三	
三十一日	三九七		一九		四・七		三八二		四(七)		一・〇	

備考

(一)新患者數ニ對スル總患者數ヘ同日ノ總患者數中前日來感冒ニ罹患セル者ヲ除去セル數ナリ。  
 (二)新感冒者數ノ欄ニ於ケル( )内ノ數ニ就テハ本文中ニ説明シアリ。

感冒表(乙)

六月	七	總患者數	感冒者數	罹患率%	總患者數	新患者數	罹患率%	七月	六	總患者數	感冒者數	罹患率%	總患者數	新患者數	罹患率%
九月	日	三八二	二九	七・五	三六三	一〇	二・七	十日	日	三八三	二五	六・五	三六七	九	二・四

表二十三第  
ノ患罹各冒感  
表數日患罹

原著 田澤 肺結核ノ一般療法

例數	日數	罹患日數
198	日	一
89	日	二
63	日	三
38	日	四
29	日	五
17	日	六
11	日	七
9	日	八
5	日	九
6	日	十
5	日	十一
5	日	十二
5	日	十三
1	日	十四
2	日	十五
2	日	十六
0	日	十七
2	日	十八
2	日	十九
0	日	二十
1	日	二十一
0	日	二十二
1	日	二十三
2	日	二十四
2	日	二十五
0	日	二十六
1	日	二十七
2	日	二十八
0	日	二十九
0	日	三十
0	日	三十一
0	日	三十二
0	日	三十三
0	日	三十四
0	日	三十五
0	日	三十六
0	日	三十七
0	日	三十八
0	日	三十九
0	日	四十
1	日	四十一

六月十一日	三・八二	二・三	六・〇	三・六六	七	一・九	二・六日	四〇七	二・一	五・一	三・九一	五	一・二
十二日	三・八三	一・七	四・四	三・七一	五	一・三	二十七日	四〇七	二・九	七・一	三・九三	一・五	三・八
十三日	三・八三	二・五	六・五	三・七一	二・五	四・〇	二十八日	四〇七	二・七	六・六	三・八七	七	一・八
十四日	三・八三	二・四	六・二	三・六九	一・〇	二・七	二十九日	四〇六	二・三	五・六	三・八九	六	一・五
十五日	三・八一	二・八	七・四	三・六八	一・五	四・〇	三十日	四〇五	一・七	四・一	三・九五	五	一・二
十六日	四〇六	三・〇	七・三	三・八六	一・〇	二・五	七月 一日	四〇四	一・七	四・二	三・九五	八	二・〇
十七日	四〇六	三・五	八・六	三・八三	二・〇	三・一	二日	四〇五	二・一	五・二	三・九三	九	二・二
十八日	四〇二	三・三	八・二	三・七七	八	二・一	三日	四〇六	一・七	四・一	三・九五	六	一・五
十九日	四〇二	二・四	五・九	三・八五	七	一・八	四日	四〇五	一・六	三・九	三・九六	七	一・七
二十日	四〇四	二・一	五・一	三・八九	六	一・五	五日	四〇四	一・七	四・二	三・九四	七	一・七
二十一日	四〇七	二・七	六・六	三・九〇	一・〇	二・五	六日	四〇七	二・三	五・四	三・九六	一・一	二・七
二十二日	四〇七	二・三	五・六	三・九〇	六	一・五	七日	四〇六	一・四	三・〇	三・九六	四	一・〇
二十三日	四〇八	二・七	六・六	三・八九	八	二・〇	八日	四〇七	一・九	四・〇	三・九六	八	二・〇
二十四日	四〇八	二・五	六・一	三・九二	九	二・二	九日	四〇六	二・一	五・一	三・九五	一〇	二・五
二十五日	四〇八	二・二	五・三	三・九〇	四	一・〇							

第三十三表  
各感患者ノ罹患總日數表

例數	罹患日數
71	日一
28	日二
34	日三
19	日四
26	日五
20	日六
7	日七
10	日八
10	日九
7	日十
9	日十一
6	日十二
9	日十三
6	日十四
2	日十五
1	日十六
5	日十七
0	日十八
1	日十九
2	日二十
3	日二十一
1	日二十二
1	日三十二
0	日四十二
0	日五十二
2	日六十二
1	日七十二
0	日八十二
2	日九十二
0	日十三
2	日一十三
1	日二十三
1	日三十三
0	日四十三
0	日五十三
1	日六十三
2	日七十三

寒季開放療法ニ於ケル感冒罹患率ハ又第三十一表ニテ見ラル、如ク開放療法ニ慣ル、ニ從ツテ次第ニ減少ヲ示スモノゾアリマス。之レハ一ツニハ患者ノ不注意ガ減ズルタメデアリマセウガ、一ツニハ又鍛練 *Abhärtung* ニ依ルモノト見ルコトガ出來マセウ。兎ニ角、一寸寒サニ遭フテモスグ鼻風ヲ引キ、鼻ノグス〜イフ如キ習慣ナリシ人が、寒季大氣療法ニ依リテ、次第ニソノ習慣ヲ脱シ感冒ニ對スル抵抗力ノ増シタル例ハ多ク見ル所デアリマス。

殊ニ多年暖房ニ最善ノ注意ヲ拂テ、室溫ヲ一定ノ溫度ニ保ツニ苦心シテ居タ様ナ人デ一寸外出スルカ、少シク隙間風デモ吹込メバ直グ感冒ニ罹ルトイフ習慣デアツタ人が思切テ極度ノ開放療法ヲ行ヒ、我々ヨリモ種々實行方法ニ注意ヲ加ヘタ處、遂ニ冬春中一度モ感冒ニ罹ラナカツタトイフヤウナ例モ少クアリマセン。

東京市療養所デハ患者ノ數ガ多クアツテ不注意ナモノモ少クハナク然カモ看護ノ手モ足リナク、又設備等モ不完全デアリマスカラ、我々ガ餘程注意ヲ加ヘテモ其例ノヤウニハ參リマセンガ、ソレニシテモ割合ニ罹患者モ少ク、又寒季ノ途中カラハ、次第ニ減少シテ居ルトイフ事實ハ之ヲ認ムルコトガ出來マシタ。

前ニ述ベタ二月十八日正午ヨリ十九日正午ニ至ル一日間ニ於ケル自覺調査(第二十五表)ノ際感冒性ノ病狀ニ就テモ調査シマシタガ、ソレニ於テハ症狀ナシト記載セルモノ一二一名ト、無記載者(他ノ調査事項ハ記載セル故、感冒性ノ症狀ノミ無記載ナルハソレノ無カリシモノト見ル)二八九名ヲ合シテ四一〇名トナレルニ對シ何等カ感冒性症狀ノ記載ヲナシタル者ハ五五名ニ過ギマセン、コノ中ニモ不確實ナ記載モアリ又眞ノ感冒デナク肺結核ソノモノ、症狀ナラザルヤヲ保シ難キモノモアリマス。

第二十一表ノ感冒表ニ於テハ二月十八日ノ感冒患者總數ニ十九日ノ新患ヲ加フルモ、二十二名ニ過ギマセンカラ、上記五十五名ノ大凡半數ハ通常感冒ト考ヘザル程ノ些細ナ事項ヲモ特ニ記載シタルモノカ、又ハ日々ノ感冒調査ニ加ハラザリシ患者即チ主トシテ、重症肺患者ノ記載ニ依ルモノデアリマス。故ニソレハ、必ズシモ眞ノ感冒トハ見ラレナカラウガ兎ニ角何カ感冒性ノ症狀ニ氣ノ付イタ者ヲ全部集メテモ尙割合ニ少イモノデアルトイフコトガ分リマス。冬季ニハ一家數人ノ各家庭デモ感冒性ノ症狀ヲ有スル者ハ相當ニ多イガ通常デアルトイフ平素ノ所見ト比較シテ見ルト割合ニ少イトイハ子バナリマセン。

(五) 天候ノ開放療法ニ及ボス影響

寒冷ノ季節ニ於ケル開放療法ニ於テハ天候ノ如何ニヨリ患者ノ自覺ニ何等カノ相違アランカラヲ調査シマシタガ、其成績

第三十四表 開放療法中大體ニ氣持良シ

トセラル、順位

順位	天氣模樣			
	快晴	雪	雨	曇風
第一位	二〇八			
第二位		七九	七七	五五
第三位		五六	九五	五四
第四位		七一	三九	七二
第五位		九		三六
				一七〇

表中數字ハ大々ノ順位ヲ擧ゲタル人數ナリ。

總人數ハ二二一人ナリシマ、各欄ニ於テ餘リ少キ人數ハ省略セ

第三十五表 天候ノ氣分食欲睡眠ニ及ボ

ス影響

氣	分		食		慾		睡		眠
	並	不	良	並	不	並	不		
快晴	一一	二	二〇〇	七	四	一九二	一八	二	
雪	一一	二	一四四	一七	四五	一七七	一九	一四	
雨	一三〇	八	一四一	三三	三九	一五七	二二	一五	
曇	七七	一一	一二五	四二	五二	一五三	一五	一八	
風	四五	一一	一〇六	三一	八五	七七	一五	一〇三	

第三十六表 天候ト感冒性症狀トノ關係

無	キ	者	有	ル	者	無	記	者	總	人	眞
一四	八二	一七	二六	七	一	一	一	一	一	一	一
風	風	雨	曇	雪	快	晴	風	風	風	風	風
風ヲ引キ易クナル 「ク」レ「ヤ」ミ「ガ」出テ困ル 咳嗽ガ多クテ困ル 悪感氣味ガアル 鼻ノ痛ミガ多クナル 鼻水ガ出テ困ル 咽喉ガ痛クナル 呼吸ガ苦シクナル 咳嗽ガ出テ困ル 身體冷却シテ風引キ易クナル 悪感ガスル 鼻水ガ出ル ノボセテ困ル 頭ガ重クナル 鼻水ガ出ル 耳ガ遠クナル 悪感氣味ガスル 鼻水ガ出ル 咳嗽ガ出テ困ル 風引キタルトキハ頭痛アリ 鼻ツマル	風	雨	曇	雪	快	晴	風	風	風	風	風
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二

デ、間接ニモ不快ナ現象ヲ起シ勝チデアリマセウ。風ガ其方向ニ依テ著シク寒暖ノ差ヲ異ニスルコトハ明カナ事デアリマス。

日本ハ風ノ多イ國デ東京邊ナドモ風ノ強イ土地デアリマスカラ、冬季ノ大氣療法ニ於テハ注意シテ風ヲ避クルヲ要シマス。土地ノ選ミ方、家屋ノ構造、戸障子ノ開閉、衝立屏風ノ應用等ニ依テ可及的風ヲ避クルヲ肝要ト考ヘマス。但シ風ニ依テ溫度濕度ノ動搖ガハゲシクナルコトハ刺戟ヲ大ニスル譯デアリ、又風ハ器械的刺戟ヲモ與ヘルモノデアリ、又蒸發ヲ盛ニシテ身體ヲ冷却サセル作用モアリマスカラ適當ノ度合ニ之ヲ利用シ得レバ鍛練 *Abhärtung* ノ目的ニハ大ナル作用ヲ及ボシ得ル譯デアリマス。故ニ開放療法ノ有效ナ理由ノ中ニハ之モ數ヘテ然ルベキモノト思ヒマス。

ハ上表ノ通りデアリマス。之ニ依レバ氣分、食慾、睡眠、感冒性症狀何レモ快晴ノ時ヲ良好トスル者ガ最多數デアリマス。雪ト雨ハ略々同數デアルガ、雪ヲ良トスル者ガ稍々多ク之レニ次グハ曇天デアリマス。風ノ日ニハ是等凡テヲ不良トスル者ガ最多ク、就中氣分ト睡眠ノ冒サレルトイフ者ガ多イ食慾不良ヲ舉ゲル者モ多ク感冒性症狀ヲ訴フル者モ他ノ天候ノ數倍トナリマス。曇天次デ雨天ノ兩者ニモ氣分ノ惡ルイトイフモノハ相當ニ多クアリマス。

天候ノ影響ハ昨年ノ嚴冬ノ際ニモ調バマシタガ、此時モ同様ノ結果デアリマシタ。

何故ニ風ガ厭ハレルカノ理由ハ種々アリマセウガ、一ツハ塵埃ヲ立テルカラデアリマセウ。又呼吸困難ヲ訴ヘル者ナドモアリマス。其他風ハ氣溫、濕度ニモ變化ヲ起シマスノ

尙又夏期ニ於テハ暑氣及ビ平均濕度ノ高キコトガ療養上ノ不利ガアリマスカラ、風ニ依テ涼味ヲ得ルコトハ却テ有效ト見ラレマセウ。

濕氣。日本ノ氣象トシテハ濕度ノ強キコトハ何事ニモ問題トナリマス。肺結核患者ニ開放療法ノ行ハレ難キ理由トシテモ通常人ノ話頭ニ上ル所ノモノハ日本ニテハ濕氣強キガ故ニ西洋ノ眞似ハ出來ナイトイフ點デアリマス吾々ノ考ヲ以テシマシテモ日本ニ於テ濕氣強キコトハ開放療法實行ニ當テハ充分ニ顧慮スベキ問題デアツテ決シテ輕々ニ看過シ得ルコトデハナイト信ジテ居マス。私ハ嘗テ北米紐育州「サラナーク、レーク」ニ於テ嚴寒ノ候ニ寒風寒雨ノ強カリシ翌日早晨ニ開放療法中ノ患者ヲ見廻ハリマシテ、ヤハリ何時モノ通り雨戸ノ外ニテ床ガ雨ニ濡レタ場所ニ寢テ居タ一日本人ニ尋子マシタ際モ、風雨ノ夜デモ平氣デハアルガ、如何ナル日ガ一番行ヒ惡イカト云ヘバ濕氣ノ強イ天候ノ時デアルトイフ答デアリマシタ。濕氣ノ強イ空氣ハ乾燥シタ空氣ヨリ冷氣ヲ感ゼシムルコトノ大ナルハ事實デアリマス(之ハ蓋シ水分ノ蒸發ニ依テ體溫ヲ奪フ爲メデアリマセウ)。尙又ジメノシタ感ジソノモノモ決シテ好イ感ジトハ云ハレマセンカラ、兎ニ角濕寒ニ於テハ乾寒ヨリ開放療法ノ實行上ニ困難ガ大キイトイフコトハ事實デアリマス。更ニ又衛生上ノ立場カラ考ヘマシテモ「レウマチス」性ノ疾患等ニ對シテハ濕寒ハ甚ダ不利デアリマス。

吾人モ濕氣ノ強イコトヲ決シテ好イトハ考ヘマセンガ、問題ハ日本デハ濕氣強キ故ニ肺結核患者ノ開放療法ハ不可能カドウカトイフ點デアリマス。

東京邊デモ平均比濕ノ高イノハ暑サノ季節デアリマスガ、此頃ニハ餘リ獎勵シナクトモ、患者ハ自ら進デ窓ヲ開放シマス。或ハ勸メテ開放ヲ行ハシムルニモ大ナル困難ハアリマセン。梅雨ノ頃ニモジメノシテ居テ多少不快ナコトモアルカモ知レナイガ易ク行ハレマス。故ニ濕氣ガ果シテ開放療法ノ妨害ニナルコトガアルトスレバソレハヤハリ寒冷ノ季節ノコトデアリマス。

寒冷季ノ平均比濕ハ紐育邊ヤ獨逸ナドノ方ガ東京地方ヨリ餘程高クアリマスガ、之レハ氣溫ノ低下ヨリ來ル關係デアリマス。日本デハ併シ氣溫ノ動搖ニ連レテ比較濕度ノ動搖ハ劇シクアリマス。我療養所デモ早晨ナドニハ比較濕度ハ何時



モ一〇〇又ハ一〇〇近クニナリ勝チデアリマス。故ニ此時刻ニ特ニ注意スル必要ガアルカガ問題デ、一日中開放療法ガ出來ナイトイフ筈ハアリセン。前ニ第二十八表ニ於テ寒季開放療法ニ於ケル一日中ノ各時刻ノ患者自覺ノ相違ヲ示シマシタガ、之レニテモ別段タイシタ差違ハアリマセン。併シ少シク午後夜中早朝及晩ヲ不良トスル者ガ多クアリマシガ、之レハ恰度又比較濕度ノ高イ時ニ當ツテ居リマス(第二十表參照)。天候ノ寒季開放療法ニ及ボス影響(第二十四表)ニ於テハ氣分不良トイフ者ハ風ノアル日ニ最モ多キモ、次デハ曇天ト雨天ノ日ニ多クアリマス。又後ニ述ベマスル如ク

第三十七表 晴雨ト各症候ノ起レル回数

(大正十四年四月以降十二月迄)  
 (れ號舎患者二十八名ニ就テ)

調査事項	天氣		盜汗	體溫	咯血	血
	實數	%				
晴	一三	一四・四	一三	一四・四	一一	二九・七
晴曇	一三	一四・四	六	一八	二	五・四
晴雨	六	六・八	一九	三三	八	二一・六
曇	一九	二二・二	一九	六〇	四	一〇・八
曇雨	一九	二二・二	二〇	三一	九	二四・三
雨	二〇	二二・二	九〇	二四五	三	八・一
計					三七	

備考 (一)患者數二十八名ノ中若干名ハ中途ニテ退所セリ。

(二)%ハ各症候夫々ノ總數ニ對スルモノ。

象ト對比シテ見マシタ處平均比濕ノ高イ日ト諸症候不良ノ多イ日トガ恰度一致シテ居リマス、(第二十八表二十二日、二十三日及二十七日)。氣溫トハ少シモ一致シテ居マセン。

一年間ニ互テ晴雨ト各症候ノ起ル回数トヲ對比シテ調査シタ所ニ於テモ盜汗ノ雨天、曇天ニ多イトイフコトハ稍々一定シタ成績ヲ來シマシタ。之ガ偶然ノ一致テナイト決スルニハ、尙多數例ノ統計ヲ要シマスコト故我々モ今後引續キ調査ヲ重テ積リデアリマス。

何ントカシテ今少シ精細ニ濕度ト症候トノ關係ヲ知リタク考ヘマシテ、今年二月十九日ヨリ二十八日迄十日間、一定ノ患者ヲシテ毎日ノ氣分、食慾、睡眠ノ良否及感冒性症狀ノ有無ヲ記載セシメ、各日ノ全記載數ニ對スル其日ノ不良等ノ數ノ比率ヲ求メ、之ヲ各日ノ氣



マチス」性疾患等ヲ有スル特殊ノ患者ニ就テハ特別ノ注意ヲ要スルトイフニ過ギナイコトト思ヒマス。

密閉シタ肺結核患者ノ室ニ火鉢ヲ入レテ水蒸氣ヲ立テテ居ルノモ、又戶外ノ濕氣ヲ問題トシテ全ク開放シナイノモ、ソレハ何レモ濕氣ニ對スル觀念ノ誤謬ト見ルベキデアリマス。俗間デハ又夜露ト言テ恐レラレマスガ、之レモ寒冷季ニ於テ事實氣溫ノ下ルノハ多クハ夜ノ明ケテ後(七時前後)デアリマスカラ比較濕度ノ高クナルモヤハリ此頃デアリマス。尙次ニ述ブル各月ノ氣象ト肺結核ノ消長ノ條下ニ於テモ自然濕氣ノ問題ニ觸ル、コトトナリマス。(未完)